

資料集(11)

アナクサゴラス

A 生涯と学説

生涯

1

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』Ⅱ 6-15）

(6) アナクサゴラスはヘゲシブウロスかエウブウロスの子で、クラゾメナイの人。この人はアナクシメネスの弟子であった。そしてヌース〔知性〕を質料の上位に置いた最初の人であり、その著作（それは甘美で、しかも高邁な調子で説かれた書であった）は次のように始まっていた。「すべてのものは一緒にあった。それからヌース〔知性〕がやってきて、それらを秩序づけた。」ここから彼は「ヌース」と呼ばれるようになったのであり、ティモンもまた『シロイ』において彼について次のようにいっている。

アナクサゴラスは何でも勇敢なる英雄で、「ヌース」と呼ばれていたとのことだ。

というのも、実に彼にはヌース〔知性〕が具わっていて、それは突然目覚めると、

それまでごった混ぜの状態にあった万物をひとつに纏め上げたのだから。

彼は生まれの良さでも富の点でも衆に抜きん出ていたが、さらに度量の大きさでもそうであった。事実彼は父祖伝来の財産を身内の者たちに譲り渡したのである。(7) すなわち彼は財産をおろそかにしているといって身内の者から責められたとき、「それじゃ、どうしてあなたたちがその面倒をみないのか」といって、〔それを彼らに委ねた〕のである。結局彼は世間から身を引いて、政治上の問題で心を煩わすことなく、自然学の問題の考察に専心したのであった。「故国のことが君には気にならないのかね」といわれたとき、その人に対して彼は「とんでもない、ぼくにも故国のことは大いに気になるのだ」と答えたが、その指は天を指していたのである。

クセルクセスが進攻してきたとき、彼は20歳で、72年間生きたといわれている。アポドロスは『年代記』において、彼は第70オリュンピア祭年〔前500-497年〕に生まれ、第88オリュンピア祭年の第1年目〔前428年〕に死んだといっている。また彼は、パレロンのデメトリオスが『執政官録』においていうところによれば、カリアスが執政官であったとき〔前456年〕にアテナイで哲学を始めたが、それは彼が20歳のときであった。そして彼はアテナイに30年間滞在したとのことである。

(8) 太陽は灼熱したミュドロス〔鉄塊〕であり、ペロポネソス半島より大きいと彼は語っていた（そういったのはタンタロスであるという人たちもいるが）。月には住居があり、山や溪谷もあるという。また同質素を原理とした。すなわち、ちょうど黄金が砂金と呼ばれる金粉から出来ているように、万有も同質的な小物体から合成されているというのである。またヌース〔知性〕が運動の原理である。物体のうち、重いもの（例えば土）は下方の位置を占め、軽いもの（例えば火）は上方の位置を占める。そして水と空気が中間の位置を占める。というのも、そのようにして、太陽によって水分が蒸発させられた後、大地（それは平板である）の上に海が造り出されたのだからである。(9) 諸星は最初トロス〔円形建造物〕のような形で運行していた。したがって目に見える天体の軌道は常に大地

の真上にあったが、後に傾きを取るようになった。また銀河は太陽によって輝いているのでない諸星の光の反射である。彗星は焰を放つ惑星〔小惑星〕が合体したものである。流星は空気によって火花が吹き出されるのに似ている。風は、空気が太陽によって稀薄化されるとき、生じる。雷鳴は雲の衝突であり、稲妻は雲の摩擦である。地震は地中への空気の侵入によって起こる。動物は水分と熱と土から生じたが、後には互いの間から生まれるようになった。その場合、〔子宮の〕右側からは雄が生まれ、左側からは雌が生まれる。

(10) 彼はアイゴス・ポタモイ〔アイゴス河〕付近で起こった隕石の落下を予言したとのことである。石がやがて太陽から落ちてくるであろうと彼はいついていたのである。そこからエウリピデス（彼はアナクサゴラスの弟子であった）もまた『パエトン』の中で、太陽を「黄金の塊」と呼んだのである。また彼はオリュンピアに赴いたとき、今にも雨が降り出すかのように皮の外套にくるまって坐っていたが、実際またその通りになった。ランプサコスの山地がいつか海になるといったことがあるだろうかと尋ねた人に対して、「時間さえ尽きなければ」と彼は答えたといわれている。ある時、何のために生まれてきたのかと尋ねられて、「太陽と月と天界を観察するために」と答えている。「あなたはアテナイの人々から見捨てられたのだ」といった人に対して、「いや、ぼくではなくて、彼らの方か」と彼は答えた。マウソロスの墓を見て、「大金をかけた墓は石と化した財産の亡霊に他ならない」と彼はいった。(11) 異国の地で死ぬことを嘆いていた人に対して、彼は「どこからであっても、ハデスにいたる道は同じだよ」といった。パボリノスが『歴史研究雑録集』においていうところによれば、ホメロスの詩は徳と正義を主題とするものであるという考えを最初に明確に主張したのは彼であったように思われる。そしてその説を彼の知人であったランプサコスのメトロドロスがさらに敷衍したのであるが、この人はホメロスを自然学上の問題に関して研究した最初の人でもあった。またアナクサゴラスは図解入りの書物を公刊した最初の人であった。シレノスが『歴史』の第1巻においていうところでは、隕石が天から落ちてきたのはデミュロスが執政官のときであった。(12) そしてアナクサゴラスは、天の全体は石からなるのであって、激しい旋回運動によってそれらは〔ひとつに〕固まっているが、弛めば崩れ落ちてくることもあるといったとのことである。

彼の裁判についてはさまざまなことが語られている。ソティオンが『哲学者の系譜』の中で述べているところによれば、彼はクレオンによって不敬の咎で告発されたが、それは彼が太陽は灼熱したミュードロス〔鉄塊〕であるといったからである。しかし弟子のペリクレスが彼のために弁明したので、5タラントンの罰金刑に処せられ、追放されたとのことである。だがサテュロスは『伝記』において、ペリクレスの政敵であったツキュディデスによって彼は裁判にかけられたのであり、それも単に不敬罪というだけでなく、ペルシアへの内通ということで欠席のまま死刑を宣告されたと語っている。

(13) 死刑判決と子供たちの死という二つの報告が彼に伝えられたとき、一方、判決については、「あの人たちについても、わたしについても、自然はとおの昔に判決を下している」と彼はいったとのことであり、他方、子供たちのことについては、「彼らが死すべき者として生まれたものであることをわたしは知っていた」といったとのことである。しかしこの後の言葉は、ある人はこれをソロンに帰し、別の人はクセノポンに帰している。しかし彼は子供たちを自分の手で葬ったと、パレロンのデメトリオスが『老年について』の中で語っている。ヘルミッポスは『哲学者伝』において、彼は死刑に処せられるべき者として牢獄に拘禁されたという。そこでペリクレスが民衆の前に進み出て、自分のこれまでの生涯において何か告発されねばならないようなことがあったかと尋ねた。「何もない」と人々がいうと、「ところでこのわたしはあの人の弟子である。そこでどうか中傷にそそのかされてあの人を死罪に処すようなことはしないでいただきたい。むしろわたしのいうことを聞いて、放免してもらいたい」とペリクレスは訴えた。その結果、彼は放免されることになったが、しかし侮辱

に耐えられず、自殺したとのことである。(14) またヒエロニュモスは『覚書雑録』の第2巻で、ペリクレスは病気のために見る影もなく痩せ細っていた彼を法廷に連れ出したので、そのために彼は、判決によってというよりは、むしろ哀れみによって放免されたといっている。彼の裁判についてはこれだけにしておこう。

またデモクリトスとの会談に失敗したことで、彼はデモクリトスに敵意を抱いていると思われる。

最後には彼はランプサコスに退き、その地で没した。その折、その国の執政官たちが「何かしてもらいたいことはないか」と彼に尋ねたところ、「自分の死んだ月には毎年、子供たちに遊ぶ日を設けてやってもらいたい」と彼は答えたといわれる。そしてその習慣は今も守られているのである。

(15) ところで彼が死んだとき、ランプサコスの人々は彼を手厚く葬り、〔その墓に〕次のように刻み込んだ。

はるか宇宙の最果てまで真理を追い求めし

アナクサゴラス、ここに眠る。

彼に寄せるわれわれのエピグラム〔碑銘詩〕はこうである。

かつて太陽は灼熱した鉄塊なりと主張せし

アナクサゴラスは、それがためにあわや死刑となれしところ、

友人のペリクレスが彼を救い出せり。されど彼は、

その知恵の弱さゆえに、自ら命を絶てり。

他にも三人、アナクサゴラスという人がいた。そのひとりはいソクラテスの学園に属していた弁論家であり、もうひとり彫刻家で、アンティゴノスが彼に言及している。そして最後のひとは文法家で、ゼノドトスの弟子であった。

2

ハルボクラティオン（『辞典』）

アナクサゴラスはソピスト〔知者〕、ヘゲシブウロスの息子でクラゾメナイの人、ミレトスのアナクシメネスの弟子であった。彼は質料と万物の守護者たるヌース〔知性〕を主張したために、「ヌース」と呼ばれた。太陽は灼熱したミュドロス〔鉄塊〕であるといったのはこの人である。

3

『スーダ』（「アナクサゴラス」の項）

アナクサゴラスはソピスト〔知者〕、ヘゲシブウロスの息子でクラゾメナイの人、ミレトスのアナクシメネスの弟子であった。彼は質料と万物の守護者たるヌース〔知性〕を主張したために、「ヌース」と呼ばれた。太陽は灼熱したミュドロス〔鉄塊〕、すなわち燃える石であるといったのはこの人である。彼はペリクレスの勧めにしたがってアテナイから逃げた。そしてランプサコスに赴き、そこで自ら食を断って人生を終えた。彼は70歳で自殺したのであるが、それは彼が神について新奇な考えを持ち込んだとの理由でアテナイ人によって牢獄に投獄されたことが原因である。

4

キュリロス（『ユリアノスを駁す』I p.12 B）

第70オリュンピア祭年〔第70オリュンピア祭年の第1年目＝前500年〕に自然哲学者デモクリトスとアナクサゴラスは共に生まれたといわれており、また「暗い人」と呼ばれたヘラクレイトスも

生まれたといわれている。

エウセビオス（『年代記』）

アブラハム暦 1 5 5 7 年 [第 8 0 オリュンピア祭年の第 1 年目＝前 460 年] : アナクサゴラス没す。

4 a

パロス島大理石碑文 (ep.60 [FGrHist.239 A 60 II 1000,22])

エウリピデスは 4 4 歳で初めて悲劇に優勝した。これは 1 7 9 年前、ディピロスがアテナイの執政官であったとき [前 442/1 年] のことである。エウリピデスと同時代にソクラテスとアナクサゴラスがいた¹。

- 1) この碑文は前 2 6 4 / 2 6 3 年に制作されており、その時を起点として何年前かが表示されている。

5

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』 IX 41）

ところで年代に関しては、彼〔デモクリトス〕自身が『小宇宙』において語っているところによると、アナクサゴラスが老人であったときに彼はまだ若く、アナクサゴラスより 4 0 歳年少であった。そしてこの『小宇宙』はイリオン〔トロイア〕の陥落から 7 3 0 年後に纏められたものであると彼はいつている。

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』 IX 34-35）

しかし後には彼〔デモクリトス〕はレウキッポスに近づいた。またある人によれば、アナクサゴラスにも近づいたが、この人より 4 0 歳年少であった。だがパボリノスは『歴史研究雑録集』の中で、アナクサゴラスについてデモクリトスは次のように語ったといっている。すなわち、太陽や月についてのアナクサゴラスの見解は、アナクサゴラス自身のものではなく、古くからあったもので、剽窃されたものだといっているのである。(35) また彼は、アナクサゴラスが彼を受け入れなかったので、アナクサゴラスに対して恨みを抱き、アナクサゴラスの宇宙体系とヌースに関する教説をさんざんにこきおろしたとのことである。そうだとするのなら、どうして彼は、一部の人たちのいうように、アナクサゴラスの弟子でありえただろうか。

6

ピロストラトス（『アポロニオス伝』 II 5 p.46,22 Kayser）

アポロニオスよ、聞くところによると、クラゾメナイのアナクサゴラスはイオニア地方のミマス山から天界現象を観察し、ミレトスのタレスはミレトス近くのミュカレ半島から観察したとのことである …。

ピロストラトス（『アポロニオス伝』 I 2 p.3,6 Kayser）

アナクサゴラスがオリュンピアで、雨の極めて少ない時期に雨を予告しながら羊の毛皮を被って競技場に入ってきたということや、その家は倒壊するであろうと予言したが、違わなかったということ

(というのも、実際に倒壊したからである)、また昼間から夜になるだろうとか、アイゴス・ポタモイあたりに天から石が落下してくるであろうと予告したが、いずれも真実になったといったことを知らない者があろうか。

7

ストラボン (『地理書』 XIV p.645)

著名な人物である自然学者アナクサゴラスはクラゾメナイの人であって、ミレトスのアナクシメネスの弟子であった。そして自然学者アルケラオスと悲劇作家のエウリピデスが彼の弟子であった。

エウセビオス (『福音の準備』 X 14,13)

アルケラオスはランプサコスにおいてアナクサゴラスの学校を引き継いだ。

クレメンス (『雑録集』 I 63)

その人〔アナクシメネス〕の後にヘゲシブュロスの子クラゾメナイのアナクサゴラスがつづいた。彼が哲学をイオニアからアテナイに移植したのである。彼の後を継いだのはアルケラオスであるが、このアルケラオスの講義をソクラテスは聴いた。

擬ガレノス (『哲学者伝』 3 [Dox.599])

彼〔アナクシマンドロス〕はアナクシメネスを準備し、… アナクシメネスはアナクサゴラスの先生となった。そしてこのアナクサゴラスはミレトスを後にしてアテナイにやってきて、アテナイのアルケラオスを初めて哲学へと向かわせたのである。

8

シンプリキオス (『アリストテレス「自然学」注解』 25,19)

アクラガスのエンペドクレスはアナクサゴラスのすぐ後に生まれた。

9

プロクロス (『エウクレイデス「原論」注解』 65,21)

彼〔ピュタゴラス〕の後では、クラゾメナイのアナクサゴラスが幾何学の多くの問題に手を染めたし、またアナクサゴラスより少し年少のキオスのオイノピデスが手を染めた。

10

ゲドレノス (『歴史』 I 165,18 Bekk.)

なぜなら、ギリシア人たちが伝えているように、シュロスのペレキュデスもサモスのピュタゴラスもクラゾメナイのアナクサゴラスもアテナイのプラトンも、神学や、より正確な自然学を学ぶことを期待して、エジプトに赴いたからである。

アンミアヌス・マルケリヌス (『ローマ史』 XXII 16,22)

これ〔エジプトの秘書〕からアナクサゴラスは、石が天から落ちてきることや、井戸の泥に触れてみて、地震があることを予言したのである。

パロス島大理石碑文 (ep.57 [FGrHist.239 A 57 II 1000])

この年、アイゴス・ポタモイに石が落下し、また詩人のシモニデスが90歳で人生を終えた。これは205年前、テアゲニデスがアテナイの執政官であったとき〔前468/7年〕のことである。

プリニウス (『博物誌』II 149 f.)

次のことはギリシア人のあまねく知るところである。第78オリュンピア祭年の第2年目〔前467/6年〕にクラゾメナイのアナクサゴラスは天文学書の知識から、数日の後に太陽から岩石が落ちてくるであろうと予言したが、そのことが実際またトラキアのアイゴス河〔アイゴス・ポタモイ〕付近で日中に起こった。そしてその石は荷車一台分もある大きさで、色は褐色、今もなお見ることができる。またその夜には彗星も輝いていたという。もしこの予言のことを信ずるなら、アナクサゴラスの非凡性はなお一層驚くべきことにまで及ぶものであったことを認めることが同時に必要となるし、また太陽そのものは石であるとか、少なくともそこには石が含まれているといったことを信じたのでは、事物の本性についての〔われわれの〕理解は解体されるし、すべてが混乱すること必定である。しかししばしば石が落下することは疑いのないところである。(150) そういう理由で今日でもアビュドスの体育場ではごく普通の石が礼拝されているが、それもやはりアナクサゴラスがその国の真中に落ちるであろうことを予言したといわれているものなのである。

エウセビオス (『年代記』)

アブラハム暦1551年〔第78オリュンピア祭年の第3年目＝前466年〕、アイゴス・ポタモイに天から石が落下した。

プルタルコス (『リュサンドロス伝』12)

また他の人たちは、隕石の落下がこの不幸の前兆であったという。すなわち、多くの人の信じるところによると、天から大きな石がアイゴス・ポタモイに落下してきたのである。そしてそれは今日もなお展示されていて、ケルソネソスの住民はそれを崇めている。アナクサゴラスがそれを予言したといわれているが、彼のいうところによると、天に縛りつけられた物体のある部分が滑るか浮動するかして、そのひとつが離れて投げ出され、落下するということがあるのである。またそれぞれの星も、本来それが置かれていた場所にあるのではないと彼はいう。なぜなら、それらは石のような重い物体であって、最初、冷たくて重い部分が万有〔宇宙〕から分離されたとき、この地上に落ちてくることのないようにそれぞれの場所にしっかりと保持されていたのであるが、アイテールの抵抗と周囲からの屈折によって光ようになり、旋回運動の渦と張力によってひとつに束ねられて力づくで引っぱられるようになったからであると。… ダイマコスもまた『敬神について』の中で、隕石が落ちるに先立ち、75日間にわたり連続して天に雲が燃えるような大きな炎のごときものが見られたと伝えて、アナクサゴラスに有利な証言をしている …。

プルタルコス (『ペリクレス伝』16)

このような〔家政上の〕厳密さを完全に維持できたのは彼〔ペリクレス〕の召使のエウアンゲロスただひとりであった。この男は他に例がないほどよい素質に恵まれていたか、ペリクレスによって家

政を仕込まれていたかであろう。ところで、こうしたことはアナクサゴラスの知恵とは異なるもので、この人は「哲学への」熱中と気宇高邁さのために家を捨て、土地を荒れ放題にして羊が食い荒らすにまかせたとのことである。

プラトン（『ヒippias（大）』283 A）

なぜなら彼「アナクサゴラス」には莫大な財産が残されたが、それに注意を払わず、すべてを失ってしまった。そのように彼は思慮を欠いた知恵の使い方をしたというわけである。

14

テルトゥリアヌス（『護教論』46）

信頼性ということについて比較するなら、アナクサゴラスは預かった財産を客人に返却しようとしなかったが、キリスト者は「預かったものは必ず返すことで」部外者たちからも信頼されているのである。

15

プラトン（『パイドロス』269 E）

ソクラテス おそらく、友よ、かのペリクレスが弁論術において誰にもまして完成した人物となったのはもっともなことなのだ。

パイドロス それはまた、どうしてですか。

ソクラテス 技術の中でも重要であるほどのものは、自然についての弁論と高遠な議論を要求するものである。というのも、ああいった高尚さや万事にわたっての達成力は何かそういったところからくるように思われるからだ。ペリクレスもまた、資質が優れていたという点に加えて、それをわがものとしていたのである。というのも、彼はそういった人であったアナクサゴラスに出会い、高遠なる議論を十分に吹き込まれ、アナクサゴラスが論じるころ多かったヌース「知性」と無思慮の本性に想到して、そこからい論の技術に資するものを引き出し、それに役立てたからである。

イソクラテス（『弁論集』XV 235）

ペリクレスは二人の学者の弟子となった。すなわちクラゾメナイのアナクサゴラスと、その当時市民中最も知恵ある人と思われていたダモンである。

プルタルコス（『ペリクレス伝』4）

しかしペリクレスと最も親しく交わり、彼に民衆扇動家たる域を越えた重厚な威厳と風格を身に着けさせ、その性格の品性を全面的に高め上げたのはクラゾメナイのアナクサゴラスであった。この人のことを当時の人々は「ヌース「知性」」と呼んだが、それは自然学に対する彼の造詣の深さと並はずれた際立に人々が驚嘆したためか、あるいは彼が万有を秩序づける原理として「偶然」や「必然」ではなく、「ヌース「知性」」を立てた最初の人であったためである。この「ヌース「知性」」は純粹で混じり気なく、どのような混合物の中にあってもその同質性「品性」を他のものから区別することのできるものなのである。

キケロ（『弁論家について』III 138）

しかしこの人「ペリクレス」を教えたのは水時計に向かって吠え立てるような弁論家ではなかったのであって、それは、われわれの伝え聞くところでは、かのクラゾメナイのアナクサゴラスであった。

プルタルコス（『ペリクレス伝』6）

それでこんな話がある。ある時田舎から角が一本しか生えていない牡羊の頭がペリクレスのもとにもたらされた。占い師のランポンは額の中央から生えているその丈夫な固い角を見て、今ポリスにはツキュディデス派とペリクレス派の二つの勢力があるが、この前兆がその手に落ちた一方の側に権力は帰着することになろうといった。他方、アナクサゴラスはその頭蓋骨を二つに割って、脳がそのあり場所を満たさないで頭蓋全体から崩れ落ち、角の根元が出ているその場所に卵のような尖った形になって集まっているのを示してみせた。それでその時にはアナクサゴラスが居合わせた人々によって感心された。しかし少し後には、ツキュディデスが失脚し、民会の諸事万端が、事の大小を問わず、すべてペリクレスによって司られることになったことで、ランポンが感心されたとのことである。

プルタルコス（『ペリクレス伝』32）

その頃〔ペロポネソス戦争の始め頃〕、…ディオペイテスはまたアナクサゴラスを通してペリクレスに嫌疑を向けようとして、神々のことを認めなかったり天空の事象に関する教説を教えたりする者を告発する法案を提出した。…またアナクサゴラスについても彼〔ペリクレス〕は非常に心配して、彼を国外に送り出した。

ディオドロス（『世界史』XII 39）

さらに彼らはペリクレスの師であった知者〔ソピスト〕のアナクサゴラスを、神々に対して不敬をはたらいているとして、告発した。

プルタルコス（『ニキアス伝』23）

なぜなら、月の満ち欠けについて最も明快でまた大胆な説を初めて書きものにしたアナクサゴラス自身は昔の人ではなかったが、その説は一般の認めるところとはなっておらず、なお禁断の説として、ある種の警戒の念とか信じる気持ちを伴いつつ、少数の人々の間に流布していたに過ぎなかったからである。人々はその当時「メテオロレスケース」〔「天体を見詰める者」あるいは「高遠なことを空しく語る者」の意味〕と呼ばれた自然学者たちを、神的なことを非理性的な原因や、そこに摂理のかけられない力や必然的事象に帰して時を過ごしている者どもと見なして、歓迎していなかったのもあって、プロタゴラスですら亡命せざるをえなかったし、アナクサゴラスも投獄され、ペリクレスがやっと救い出したという次第である。

エウセビオス（『年代記』）

アブラハム暦1554年〔第79オリュンピア祭年の3年目＝前462/1年〕：太陽が欠けた。アナクサゴラス没す〔ヒエロニモスによれば、アブラハム暦1557年＝第80オリュンピア祭年の1年目＝前460/59年〕。

ヨセフス（『アピオン論駁』II 265）

アナクサゴラスはクラゾメナイの人であるが、アテナイ人たちが神と見なしていた太陽を灼熱した白石であるといったために、彼はすんでの票差で死刑を宣告される場所であった。

オリュンピオドロス（『アリストテレス「気象論」注解』17,19）

ただそれらの星だけが燃えている。アナクサゴラスもまた太陽をその計り知れない燃焼性のゆえに「ミュドロス」と呼んでいるように。というのも、「ミュドロス」とは焼け焦げた鉄だからである。それがためにアナクサゴラスもまた、大胆にもそのようなことを語る不埒者として、アテナイ人から追放処分に処せられたのであった。後に彼はペリクレスの弁護によって呼び戻された。というのは、ペリクレスはアナクサゴラスの弟子だったからである。

ピロデモス（『弁論術』II 180）

鞭で打たれたクレオンの子供のひとりがアナクサゴラスを裁判官に訴え出ることがあったし、またピュタゴラスの場合にはクロトン人のキュロンが、諸種の苦情を味方に引き入れて彼を国から追い出し、弟子の多くを焼き討ちにするということがあった。

逸名著作家の古注（ピンダロス『オリュンピア競技祝勝歌』I 91 への古注：p.38,6 Dr.）

すなわちタンタロスは自然学者然として登場し、太陽はミュドロス〔灼熱した鉄塊〕であると主張して、そのことで罰を受けているのであって、太陽が〔いつも〕彼の頭上にあって、それに彼はビクビクし、うずくまっているのである。太陽について自然学者たちは「太陽は石である」といっており、アナクサゴラスの弟子であったエウリピデスは前段のところで太陽を「岩」といっている。「タンタロスさまは、かつては仕合せな方であられましたが、・・・頭上に吊された岩におのきつつ、空中にぶら下げられて、そういった罰をお受けになっているのです。」また別のところでは「土塊」といういい方がされている。「天と地の間に吊られし岩、黄金の鎖でオリュンポスから渦巻きながら運ばれし土塊にわれは赴かん。わが父祖なるタンタロスさまに嘆きの声を張り上げんがために。」

逸名著作家の古注（エウリピデス『オレステス』982 ff.への古注）

アナクサゴラスの弟子となったエウリピデスは、太陽を「ミュドロス〔灼熱した鉄塊〕」といっている。

擬イアンブリコス（『数理神学』p.6,18 de Falco）

すでにアナクサゴラスの弟子であったエウリピデスが、このような意味で大地に言及している。

「死すべきもののどもの知者たちは、あなたを竈〔ヘスティアー〕と見なしている。」

〔参照〕エウリピデス（断片944）

母なる大地よ、死すべきもののどもの知者たちは

あなたを天空におわす竈〔ヘスティアー〕と呼んでいる。

サテュロス（サテュロス断片37 col.1,22 p.139）

それから彼〔エウリピデス〕はアナクサゴラスを驚くほど敬愛した ……。

サテュロス（サテュロス断片37 col.3,9）

「万物の支配者たる御身にわたしは初穂たるペラノス〔聖なる餅〕を供え奉る。御身をゼウスと呼ぶにせよ、ハデスと呼ぶにせよ」〔エウリピデス断片912〕はこの三行で厳密にはアナクサゴラスの宇宙体系を全体として総括しているのである。彼はまた他のところでも天界の諸現象を支配するものは一体何なのかと自問して、「ゼウスよ、御身は自然の必然であるのか、はたまた死すべきものの知性であるのか」といつている。

サテュロス（サテュロス断片38 col.1,16）

そのところで彼〔エウリピデス〕は語っている。「これらのことを見れば、天文学者たちの邪な欺瞞を投げ棄てて、神を信じるように己れの魂に諭さないほど不敬で不幸な者がいるだろうか。彼らの大胆な舌は、知恵のかけらも有さぬというに、見えざるものについてでたらめを語っている。」

21

ゲリウス（『アッティカの夜』XV 20）

アイトリアのアレクサンドロスはエウリピデスについて次のような詩を書いている。

アナクサゴラスの本当の養い子、少なくとも余には辛辣と呼ぶべき人にして、
笑いを嫌う人、酒の席でふざけることを決して学ばなかった人。
しかしその記しものは蜜にもセイレーン〔の歌〕にも匹敵するならん。

アイリアノス（『ギリシア奇談集』VIII 13）

クラゾメナイのアナクサゴラスはかつて笑ったことも微笑んだことも見られたことがなかったという。

22

アテナイオス（『食卓の賢人たち』V 220 B）

彼〔アイスキネス〕の『カリ阿斯』は、当のカリ阿斯とその父との違いや、ソピストのプロディコスとアナクサゴラスに対する嘲笑を内容とするものである。すなわち、プロディコスはテラメネスを弟子として育て、後者〔アナクサゴラス〕はエウリュクシスの子のピロクセノスとキタラ奏者アリグノトスの兄弟のアリプラデスを育てたと彼は語っているが、それは、上掲の者たちの無能さとつまらないものへの食欲さから、教育した者たちの教え〔がどんなものであったか〕を明らかにせんとしてである。

23

アルキダマス（アリストテレス『弁論術』B 23. 1398 b 15 による）

またランプサコスの人々はアナクサゴラスを、外国人ではあったが、埋葬し、今日もなお尊んでいる ……。

24

アイリアノス（『ギリシア奇談集』VIII 19）

また祭壇も彼のために設けられていて、それには、ある人によれば「ヌース〔知性〕」、他の人によれば「真理」の文字が刻まれていた。

25

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者伝』II 46）

アリストテレスが『詩学』の第3巻においていうところによれば、… アナクサゴラスにはソシビオスが… ライバルであった。

26

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者伝』X 12）

ところで昔の哲学者たちの中で彼〔エピクロス〕が最も認めていたのはアナクサゴラス（もっとも幾つかの点では彼に反対していたのであるが）とソクラテスの師のアルケラオスであったと、ディオクレスはいつている。

27

〔クラゾメナイの貨幣〕

（クラゾメナイの二種類の貨幣〔ひとつは前100年頃のもの、もうひとつはローマ帝政時代のもの〕にアナクサゴラスの像が刻まれているが、特に文章は記載されていない。）

金 言

28

アリストテレス（『形而上学』Γ 5. 1009 b 25）

またアナクサゴラスが仲間のある人に寄せて語った次の金言も思い出される。それは「存在する諸物は、人が理解するように、そのようにその人にとってある」というものである。

29

クレメンス（『雑録集』II 130）

クラゾメナイのアナクサゴラスは、観照〔テオリアー〕と、それに由来する自由が人生の目的であるといったといわれている。

30

アリストテレス（『ニコマコス倫理学』Z 7. 1141 b 3）

それゆえ人々はアナクサゴラスやタレス、また彼らに類した人たちを、彼らが自分に有利であることに無知であるのを見て、知者であるとはいうが、知恵ある人とはいわないのであり、彼らは珍しいことや驚くべきこと、難解なことや人知を越えたことは知っているが、役に立たないことばかりだと人々はいうのである。それというのも、彼らは人間にとっての善を探求したわけではないからである。

アリストテレス（『ニコマコス倫理学』K 9. 1179 a 13）

アナクサゴラスもまた「幸福な人が多くの人には奇人に映ろうとも、わたしは驚かないであろう」といつているところを見ると、裕福な人や権力者を幸福な人とは考えていなかったようである。

アリストテレス（『エウデモス倫理学』A 5. 1216 a 11）

そういった問題を考えあぐねて、「人は何のために生まれてこないよりは、むしろ生まれてくる方を選ぶのだろうか」とうるさく尋ねる人に対して、アナクサゴラスは「天と全宇宙の秩序を観察するためだ」というように答えたといわれている。

〔参照〕エウリピデス（断片910）

ポリスの民を苦しめることにも不正を行なうことにも向かうことなく、不死なる自然の老いることなき秩序を、それが何のために、どこで、どのようにしてなったかを見て取ることによって、探究から学びを得し者は幸いである。そのような者には恥ずべき所業への思いなどみじんも浮かぶことはない。

31

ウェアリウス・マクシムス（『著名言行録』VIII 7 ext.6）

またどのような熱意でアナクサゴラスが〔哲学の探究に〕燃えていたか信じられようか。彼は永い外国滞在から祖国に帰って荒れ果てた家屋敷を見たとき、「こういったものが失われることなくしては、わたしは健全になりえなかったであろう」といったのである。まさに求められるべき知恵を具えし言葉ではないか。なぜなら、もし彼が才能を教化することより家屋敷に専念していたなら、彼は屋敷内にあって家族のよき主人ではありつづけていたであろうが、かくのごときアナクサゴラスとして彼らのもとに帰ってくることはなかったろうからである。

32

プルタルコス（『ペリクレス伝』16）

またこんな話がある。ペリクレスが忙しくて、アナクサゴラスは誰からにもかまわれず、すでに老齢でもあったので食を断って死んでしまおうと衣で顔を覆い隠して横たわっていた。このことがたまたまペリクレスの耳に入り、彼はびっくりして直ぐさまこの人のところに駆けつけ、もしこういう政治上の相談相手を失うなら、アナクサゴラスではなく、むしろ己が身が嘆かれると、言葉を尽くして「思いとどまるよう」懇願した。するとアナクサゴラスは覆いから顔を覗かせて、ペリクレスに向かって「ペリクレスよ、ランプを必要とする者はそれに油を注ぐものだよ」と。

33

ガレノス（『ヒポクラテスとプラトンの教説について』IV 7 p.392 f. Müller）

それゆえまた彼〔ポセイドニオス〕は、まだ現前していないことを現前しているかのように扱うことを「プロエンデメイン〔見通す〕」というのである。「プロエンデメイン」という動詞は、ポセイドニオスにおいては、事柄を近い将来起こるであろうこととして考えの上でいわばあらかじめ思い描くこと、また心にあらかじめ刻み込むこと、またすでに習慣となっているものに対しては手短になされることを意味する。それゆえ彼はアナクサゴラスの事例をそこで取り上げているのである。つまりアナクサゴラスは、ある人が息子の死という便りを彼に伝えたとき、落ち着いて「彼が死すべき者として生まれたものであることをわたしは知っていた」といったのである。またテセウスもそのような考えを語ったものと解して、エウリピデスは次のように詩作している。

わたしはある知者から学んで、

不運を常に思いの内にしておくようにしていた。
祖国からの追放とか、尚早の死とか、
その他の禍の道をわが身に招くといったことだ。
心中で考えておいた禍の何かを蒙ったとしても、
新たにわたしを襲うものとして、一層苦しめることがないようにと。

〔参照〕エウリピデス（『アルケスティス』903）

わたしの一族の内に、家中のひとりっ子、亡くすには惜しい男の子を亡くした者がおりました。だがそれでもなおその男は、すでに髪は白くなりかかり、老境に差し掛かりし身で独り身となりながらも、健気に不幸に耐えておりました。

34

ストバイオス（『精華集』IV 52 b,39 H.）

アナクサゴラスは死を教えてくれるものが二つあるといていた。誕生前の時と眠りである。

34 a

キケロ（『トゥスクルム荘対談集』I 43,104）

アナクサゴラスは立派である。彼はランプサコスで死の床にあったとき、友人たちから万が一の時には故国のクラゾメナイに運んでもらいたいかと尋ねられて、「その必要はない。どこからであってもしハデス〔冥界〕にいたる道は同じぐらいだろうから」と答えている。

著 作

35

プラトン（『ソクラテスの弁明』26 D）

「太陽は石であり、月は土であると主張するのです。この男は。」「いや、それはアナクサゴラスなのだよ、メレトス、君が訴えている積りになっているのは。…そして君はこの人たちが文字も解しない人たちで、したがってクラゾメナイのアナクサゴラスの書物がそういった論で満ちみちていることを知らないとも思っているのかね。その上、青年たちはそれをわたしから学んだと君は思っているようだが、それは、せいぜい高くても一ドラクマも出せば、いつでも市場で買い求めることができるものなのであって、もしソクラテスがそれを自分のものだと呼んでもしようものなら、笑い者にしてやれるものなのだよ。」

36

クレメンス（『雑録集』I 78）

実際言葉の教授や著述はかなり遅くなって初めてギリシアに入ってきたのである。とにかくペイリトスの子、クロトンのアルクマイオンが初めて自然についての著作を著した。また別の人の伝えるところによると、ヘゲシブウロスの子、クラゾメナイのアナクサゴラスが初めて著述によって書物を公にしたといわれている。

ディオゲネス・ラエルティオス（『ギリシア哲学者列伝』I 16）

またそれぞれ一冊しか著作を残さなかった人たちもいる。メリッソス、パルメニデス、アナクサゴラスがそうである。

プルタルコス（『亡命について』17,607 F）

またアナクサゴラスは牢獄で『円の正方形化』を書いた。

ウィトルウィウス（『建築について』VII pref.11）

最初に、アガタルコスがアテナイでアイスキュロスが悲劇を上演した時にその舞台を作り、それについての注釈書を残した。彼の報告するところによると、デモクリトスとアナクサゴラスがその同じ問題について著作し、視線の先端と照明の延長線に向けて固定した中心点が構成されると、それらの線は自然の法則に適合しなければならず、その結果、漠然とした事物の中から一定の像が舞台の背景の構築物の姿を浮かび上がらせることになり、垂直面と水平面の中に形成されたものが、あるものは退き、あるものは突出して見えるようになると論じた。

〔中世写本〕（Codex Monac.490,S.XV folio 483 V）

アナクサゴラスは困難な諸課題に関する論を記したものに『革紐』という表題を付したといわれているが、それはけだし、読む者たちを難しい問題でがんじがらめにするためであろう。

学 説

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』27,2）

ヘゲシブッロスの子、クラゾメナイのアナクサゴラスはアナクシメネスの哲学につながる人であるが、原理に関する〔あれらの〕学説を転換し、足りない原因を補充した最初の人であって、物的なそれを無限〔無数〕であるとした。すなわち、すべては水や火や金のように同質的であり、不生不滅であって、また生成したり消滅したりすると思われるのもただ合成や分離によるのでしかなく、すべてのものの中にはすべてのものがあるが、各々のものはその中の優勢なものによって性格づけられるのだとした。なぜならその中に金素がより多く含まれているあいつのものが金として現れるのだからである。だがそれでもその中にはすべてのものがあるのである。いずれにせよアナクサゴラスは語っている。「すべてのものの中にすべてのものの部分が含まれている。」「それぞれひとつひとつのものは、何であれその中に最も多くあるものが最も目につくから、それであるし、またそれであったのだ。」アナクサゴラスのこの理論はアナクシマンドロスのそれに似ているとテオプラストスという。なぜなら前者〔アナクサゴラス〕は、無限なるものの分離において同種のものは〔同種のものどうし〕互いに相集まり、〔原初の〕全体の中で金であったものは金となり、土であったものは土となるというからである。他のものもそれぞれ同様であって、それらは生じたのではなくて、それ以前に中に含まれていたものなのである。だが運動と生成の原因は〔別であるとして〕、アナクサゴラスはヌ

ース〔知性〕を立てた。ヌース〔知性〕によって区別されたものが世界と他の諸物の本性を生み出したのである。テオプラストスのいうところによると、彼らの考えるところはかくのごとくであるが、アナクサゴラスは、一方質料的原理は無限〔無数〕であるが、他方運動と生成の原因はただひとつ、すなわちヌース〔知性〕がそれであととしたとも考えられよう。それで、もし一切のものの混合を形と大きさにおいて不定なひとつの实在と考えるなら、彼は無限定な实在とヌース〔知性〕という二つの原理を語ったことになる。したがって物的元素については、彼もアナクシマン드로スと似たような仕方で構想しているわけである。

〔参照〕シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』166,15）

「小さいものについても、最小ということはないのであって、常により小さいものが考えられる」とアナクサゴラスはいつているが、大きいものについても同様である。（このことはアナクサゴラスの言葉そのものが明らかにしているが、テオプラストスもまた『アナクサゴラスについて』の第2巻において次のように記している。「次にこのこと、すなわちすべてのものは大きさにおいても小ささにおいても無限であり、したがって最小のものも最大のものも捉えることはできないというこのことによって、すべてのものの中にすべてのものがあると論じるのは、信ずるにたるものではない。」）

42

ヒッポリュトス（『全異端派論駁』I 8,1 ff. [Dox. 561, W. 13]）

(1) 彼〔アナクシメネス〕の後にヘゲシブウロスの子、クラゾメナイのアナクサゴラスが生まれている。この人は、万有の原理をヌース〔知性〕と質料とした。ヌース〔知性〕は形成するもの、質料は形成されるものである。なぜなら、すべては一緒にあったが、ヌース〔知性〕がそこへやってきて秩序づけたというのだからである。質料的原理は無限であり、それらの「より小さい」ということも無限であると彼はいう。(2) 万物はヌース〔知性〕によって動かされて運動に与かり、同じものが集まる。そして天の領域にあるものは円運動によって秩序づけられる。さて一方、濃密なもの、湿ったもの、暗いもの、冷たいもの、重さを有するすべてのもの、これらは中心に集まり、それらが固まって大地が形成された。他方、それらに対立するもの、温かいもの、明るいもの、乾いたもの、軽いものはアイテールの彼方へと追いやられる。(3) 大地は形において平たく、その大きさのゆえと空虚〔空隙〕がないために空中に浮いている。また空気が極めて強力で、大地を乗せて支えているためでもある。(4) 地表の水分についていえば、海は地中の水から出来た（蒸発した後に、沈殿した部分があのように生じたのである）。またそれに注ぎ込む河からも生じた。(5) 河は雨と地中の水からその水源を得ている。なぜなら大地は空洞になっており、その窪みに水を包蔵しているからである。ナイル河は、南部地域〔エティオピア〕の雪の堆積から水が流れ込んでくるために、夏、増水する。(6) 太陽や月、それにまたすべての星が灼熱した石であり、それらはアイテールの回転運動に巻き込まれている。諸星の下に太陽や月と一緒に周回するある物体があるが、それらはわれわれには見えない。(7) 星の熱を感じないのは大地からの距離が大きいためである。またそれらはより冷たい地域を占めているために、太陽と同じようには熱くない。月は太陽の下にあり、われわれに近い。(8) 太陽はその大きさにおいてペロポネソス半島を凌駕している。月は自らの光を有さず、その光は太陽からのものである。諸星の軌道は大地の下を通過する。(9) 月は大地が遮ることによって蝕を起こす。ある時には月の下にあるものが遮ることによっても起こす。太陽は、新月の時に月が遮ることによって、蝕を起こす。太陽も月も、空気によって押し返されることによって、反転する。月も冷たさに勝つことができないためにしばしば折り返すのである。(10) 彼は日・月蝕と〔月の〕輝きの問題を初めて明確

にした人であった。月は土であり、そこには平野や溪谷があると彼はいった。天の川は星の光の反射であるが、それらの星は太陽によって照らされているのではない。流れ星はいわば蒼穹の運動から跳び出した火花のようなものである。(11) 風は空気が太陽によって稀薄化されることによって生じる。また物が燃え、そのものから退去して蒼穹に向かって飛び去ることによっても生じる。雷と稲妻は雲の中に落ち込む熱から生じる。(12) 地震は、上方の空気が大地の下のそれに流れ込むことによって起こる。すなわち空気が動くことで、その上に乗っている大地を揺り動かすのである。動物は最初湿気の内に発生したが、後には互いから生まれるようになった。そして〔睾丸の〕右側の部分から出た種子が子宮の右側にくっつくとうがが生まれ、その反対になると雌が生まれる。(13) 彼は *** に盛年であった。〈そして〉第88オリュンピア祭年の第1年目〔前428年〕に〈没した〉。まさにその年にプラトンは生まれたといわれている。また彼は予知能力を持っていたともいわれている。

43

アリストテレス（『形而上学』A 3. 984 a 11）

クラゾメナイのアナクサゴラスは、年齢の点では彼〔エンペドクレス〕より前の人であるが、仕事の面では後であって、原理は無限〔無数〕であると主張する。すなわち同質部分的なもののほとんどすべては、ちょうど水や火のように、ただ結合と分離という仕方でのみ生成したり消滅したりするのであって、それ以外の仕方では生成することも消滅することもなく、永遠にそのままでありつづけると彼はいうのである。

アリストテレス（『天体論』Γ 3. 302 a 28）

アナクサゴラスは元素についてエンペドクレスと対立する見解を述べている。なぜならエンペドクレスは火や土やこれらのものと同類のものが物体の元素であって、すべてはそれらから合成されているというが、アナクサゴラスはその反対のことを主張するからである。すなわち同質部分的なものが元素であると彼は主張するのである。ここで同質部分的なものとはわたしがいうのは、例えば肉や骨やそういったもののそれぞれのものである。空気や火はそれらの混合体なのであり、その他の種子すべての混合体なのである。これらのそれぞれ〔空気や火〕は目に見えない同質素のすべてが集まって出来たものなのである。それゆえ万物はこれら〔空気や火〕から生成するとも彼はいう。また火とアイテル〔空気〕を彼は同じものと呼んでいる。

44

ルクレティウス（『事物の本性について』I 830 ff.）

(830) さて、それではアナクサゴラスの同質素、ギリシア人のいうところの「ホモイオメレイア」を検討することにしよう。これはわが母国語の貧困さがわれわれの言葉で語ることがわれわれに許さないものであるが、しかし事柄そのものを言葉に表わすことは容易である。まず第一に彼が「ホモイオメレイア〔同質素〕」というものについてであるが、骨はすなわち微小にして微細なる骨からなり、また肉も微小にして微細なる肉からなり、血は多くの血滴が互いに相集まって出きており、金は金粉から構成されていると彼は考えるのであり、そしてまた土は小さな土が固まったものであり、火は火から、水は水からなり、その他のものも同様の理屈で出来ていると彼は構想し、かつ考えるのである。しかしまた彼は事物の内に空虚の存することを決して認めようとはせず、また物体の分割に終局のあることも認めない・・・。

(875) …… これはアナクサゴラスが取り上げているものであるが、すなわちすべてのものにはすべ

てのものが混入され、隠されているが、そのうち、最も多く混じられていて、より前面に、第一番目に置かれているものが〔そのものとして〕現れると彼は考える。

45

アリストテレス（『自然学』Γ 4. 203 a 19）

他方、元素を〔数において〕無限であるとする人々は、例えばアナクサゴラスとデモクリトスがそうであるが、前者は同質素からなるとし、後者は諸々の形を含み込んだパンスペルミアーからなるとするが、両者ともその無限なるものを接触によって連続しているとしている。そして前者〔アナクサゴラス〕はすべての部分が全体と同じ仕方で混合されているとするが、それはそのいずれからでもいづれのものも生じることを観察したためである。

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』460,4）

一方アナクサゴラスは同質素を原理とし、他方デモクリトスは原子を原理として立て、双方ともそれらを数において無限であるとするが、彼〔アリストテレス〕はまず最初にアナクサゴラスの教説について論じ、アナクサゴラスがそういったことを推測するにいたった理由をわれわれに教示し、混合体全体が大きさにおいて無限であるとアナクサゴラスはいわねばならないのみならず、各々の同質部分的なものも全体と同じように内在するものをすべて含むといわねばならず、それらは無限であるのみならず、また分割においても無限でなければならないということを示しているのである。しかしこういった推測にアナクサゴラスがいたったのは、有らぬものからは何ものも生成せず、すべては同じものによって養われると考えたためである。さて〔このように彼は考えたわけであるが〕、このことは彼がすべてのものからすべてのものが生じるのを見たからである。たとえ直接的にはそうでなくとも、系列的に見ればそうである（なぜなら、火から空気が、空気から水が、水から土が、土から石が、石からまた再び火が生じるからであり、また同じ栄養を、例えばパンを摂取することによって同じでない多くのもの、肉、骨、血管、腱、毛、爪、そして場合によっては、羽や角が生えるからであるが、しかし他面、同じものは同じものによって成長するのだからである）。そのゆえに栄養とか水の内には、それによって樹々が養われているのであるなら、木や皮や実が含まれているはずだと彼は想定したのである。それゆえすべてのものの中にすべてのものが混入されており、生成は分離によって起こると彼は主張した。それに加えて、石から火が生じ、水から空気が泡立つというように、恒存的に存在するものからも他のものが生じるが、このこともまた恐らく示唆するところあったであろう。ところで今分離されて存在する個々のものからすべてのものが分離してくるのを見て、例えばパンから肉や骨、その他のものが分離してくるが、それはあたかもすべてのものが同時にそれに内在し、一緒に含まれていたかのごとくであるのを見て、これらのことから彼はまた、分離されるまですべてのものは一緒に混合されていたと推測した。それゆえ彼はその著作を次のように始めている。「すべてのものは一緒にあった。」したがってどのようなものも、例えばこのパンも、この肉もこの骨も含んだ「万有と同様の混合体なのである」。

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』1123,21）

他方アナクサゴラスは、無限の時間にわたってすべてのものは一緒にあって静止していたが、やがて遂に世界形成者たるヌース〔知性〕が諸々の形（それらを彼は同質素と呼ぶ）を区分しようとして、それらの内に運動を生ぜしめたといっていると、彼〔アリストテレス〕には思われたのである。

アリストテレス（『生成消滅論』A 1. 314 a 18）

なぜなら、一方〔アナクサゴラス〕は同質素、例えば骨や肉や髄といった、その部分がそれぞれと同名であるものを元素とするが ……。

アエティオス（『学説誌』I 3,5 [Dox.279]）

ヘゲシブッロスの子、クラゾメナイのアナクサゴラスは同質素が存在する諸物の原理であると主張した。というのは、有らぬものから何かが生じたり、また有らぬものに消滅して行くなどということは、彼にはどだい不可能なことであると思われたからである。ところで、われわれは単純で様な栄養物、パンや水を摂取するが、それによって毛、静脈、動脈、肉、腱、骨、その他の諸部分が養われている。そこでこれらのものが〔事実この通り〕生じてくるとするなら、摂取された栄養の中にすべてのものが含まれていて、それらのものからすべては成長するということを認めねばならない。その栄養の中に血や腱や骨やその他のものを産み出す分子があったのである。それは理性によって捉えられる分子であるとされた。なぜならすべてのものを感覚にまでもたす必要はないからであって、パンや水がそういったものを備えているということもそうであり、むしろそれらの中には理性によってしか捉えられない分子が含まれているのである。そこで、栄養内の部分が〔生物内に〕産み出される部分と同じであることから、彼はそれらを同質素と呼び、存在する諸物の原理であると主張した。だが同質素は質料であり、すべてに秩序を与えるヌース〔知性〕が形成する原因であると。彼は次のように始めている。「すべてのものは一緒にあったが、ヌース〔知性〕がそれらを分離し、秩序づけた。」彼が「もの」〔クレマートン〕といっているのは具体物のことである。したがってアナクサゴラスは質料に技術者を付け加えたと解すべきである。

プラトン（『パイドン』97 B ff.）

しかしある時、ある人がアナクサゴラスの（という話だったが）書物から、万物を秩序づけ、万物の原因となっているものはヌース〔知性〕であるというようなことを読んで語ってくれるのをぼく

〔ソクラテス〕は聞いて、その原因に狂喜したのだ。ヌース〔知性〕を万物の原因とするのは、やり方によってはよい考えであるようにぼくには思われた。そしてもしそれがその通りであるとするなら、いやしくもヌース〔知性〕が秩序づけるのである以上、それはすべてのものを最善であるように秩序づけ、またそれぞれのものを最善であるところに置くだろうとぼくは考えた。…… このようにしてぼくは事物の原因をぼくの意に適った仕方教えてくれる師をアナクサゴラスに見出したと思ったのだ。そしてぼくは考えた。まず最初に彼はぼくに大地が平たいか丸いかを告げてくれるだろう。そしてそれを告げたのち、その原因と必然性を説明してくれるだろう。それも「よりよい」ということを語り、大地はそうあることがよりよいことであったのだということを語るという仕方である。そしてもし彼がこれらのことをぼくに明らかにしてくれるなら、他の種類の原因を望むなどということはもうあるまいとぼくは心に決めたのだ。さらにまた太陽や月やその他の天体についても、それらの相対的な速度や回帰点や、その他の諸現象に関して、それと同じように学ぼうと心に決めた。つまりそれぞれの天体が作用したり、また作用を及ぼされたりする場合に、そのようにされることが一体どうしてよりよいことなのかということ。というのも、いやしくもそれらはヌース〔知性〕によって秩序を与えられていると主張するからには、それらは現にあるような状態にあることが最善なのだということ以外の何か別の原因を彼がそれらに差し向けるなどということは、よもやあるまいとぼくは考えたか

らである。そこで彼は、それらのそれぞれと共通の原因を万有に割り当てるにあたって、個々のものにとって最善なるものと万有に共通なる善を詳しく説明するであろうとぼくは思った。この期待はぼくにはいかほどの代価にも値するものであった。ぼくは大急ぎでその本を手に入れて、可及的速やかに読んだのだ。一刻も早く最善なるものと悪なるものを知りたいと思って。

だがその尋常ならざる期待からも、友よ、ぼくは運び去られ、立ち去らざるをえなかったのだ。というのも、読み進んで行くうちに、ぼくは、ヌース〔知性〕を少しも活用せず、事物に秩序を与えるどのような原因もそれに帰すことをしないで、空気とかアイテールとか水とか、その他多くの場違いなものを原因としている男をそこに見つけたからである。

〔参照〕アリストテレス（『形而上学』A 4. 985 a 18）

なぜなら、アナクサゴラスにしても、ヌース〔知性〕を宇宙創造のために機械仕掛けの神として用いるだけで、どのような原因によって必然的にそうあるのかということでアポリアに陥ったときなどにはそれを持ち出してくるが、その他の場合には、生成するものの原因をむしろすべてヌース〔知性〕以外のものに帰しているからである。

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』327,26）

アナクサゴラスもまた、エウデモスもいうように、ヌース〔知性〕には目もくれずに、多くのものを自己偶発的に出現させている。

48

アエティオス（『学説誌』I 7,5 [Dox.299]）

他方アナクサゴラスは、最初物体は静止していたが、「神のヌース〔知性〕がそれらを秩序づけ」、万有の生成を造り出したという。

アエティオス（『学説誌』I 7,15 [Dox.302]）

アナクサゴラスは、世界創造者たるヌース〔知性〕を神とする。

〔参照〕エウリピデス（断片1018）

なぜなら、ヌース〔知性〕はわれわれ各人の内に宿る神だからである。

ピロデモス（『敬虔について』c.4 a p.66 G. [Dox.532]）

神は〔かつて〕存在したし、〔今も〕存在し、〔将きも〕存在するであろう。そして万物を導き、支配する。そしてヌース〔知性〕が混合して存在する無限なるもの全体を秩序づけた。

キケロ（『神々の本性について』I 11,26 [Dox.532]）

そこでアナクサゴラスであるが、この人はアナクシメネスから教えを受けた人で、万物の配置とあり方は無限な精神の力と知性によってデザインされ、完成されたものであると主張した最初の人である。しかしこう主張することにおいて彼は、感覚と結び付き、それと合体したような運動は無限なるものにはありえないということを見誤っているのであり、またまず本性全体〔感覚する主体〕が刺激を与えられることによって感覚するようになるのでなければ、感覚といったものはまったくありえないということを見誤っているのである。さらにもし彼がそういった精神でもって何か生き物のような

ものを意味しようとしているのであるならば、〔それには〕それからしてそのものが生き物と呼ばれるに値することになるより内なるものがあることになろう。しかし精神より内にあるものとは何であろうか。かくして、それは外的な肉体を纏わねばならないことになろうが、これは彼の許容せざるところであるから、精神は露わで単純で、それによって感覚が可能になるどのようなものとも結び付かないものであることになるが、これはわれわれの理解力と道理を越えているように思われる。

49

キケロ（『アカデミカ第一』II 37,118 [Dox.119]）

アナクサゴラスは質料を無限〔無限定〕とするが、しかしそれからその中に微細な同質素が生じ、それらは最初混ざり合っていたが、やがて神的な精神によって秩序へと導かれたとする。

50

アリストテレス（『自然学』Γ 5. 205 b 1）

アナクサゴラスは無限なるもののあり場所について不条理な説をなしている。すなわち無限なるものはそれ自身で自らを支えているというのである。それは自らの内にあるからというのがその理由であるが（なぜなら他の何もかもそれを包むことはできないから）、それはあたかも、あるものがあるところにあるなら、それは元々そこにあるようになっていたからだというようなものである。

51

アエティオス（『学説誌』I 14,4 [Dox.312]）

アナクサゴラスは、同質素は形において多様であるとする。

52

アリストテレス（『自然学』A 4. 187 a 26）

アナクサゴラスがそれらをこのように無限であると考えたのは、「有らぬものからは何もかも生じない」という自然学者たちの共通の見解を真であると考えたためであると思われる。このゆえに彼はあのように「すべては一緒にあった」と語るものであり、これこれのものが生成するというのは〔実際には〕変化することではかないとした。

アリストテレス（『生成消滅論』A 1. 314 a 11）

他方、質料をひとつより多く立てる人たち、例えばエンペドクレス、アナクサゴラス、レウキッポスがそうであるが、これらの人たちにあっては変化と生成は異なるといわねばならない。しかしながらアナクサゴラスは自分のいっていることがよく分かっていなかった。少なくとも彼は生成や消滅を変化と同一視するようなことを語っているのである。

〔参照〕ヒッポクラテス（『食餌法について』I 4）

今あるどのようなものも消滅することはなく、以前になかったものが生成するということもない。混合したり分離したりして、変化するのみである。

53

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』461,20）

それゆえアナクサゴラスは何ものも完全に分解されるということとはありえないというのである。というのも、分離は完全な分散ではないからである。

54

アエティオス（『学説誌』I 17,2 [Dox.315]）

アナクサゴラスやデモクリトスの説を奉じる人々は、混合は元素の並置に基づくとする。

55

プラトン（『クラテュロス』413 C）

〔また他の人は〕アナクサゴラスが語っていることが正しいのであって、すなわちそれはヌース〔知性〕である〔というのだ〕。なぜなら、ヌース〔知性〕は自律的で、何ものとも混合せず、すべてのものを貫いて、すべてのものを秩序づけると彼はいうからである。

アリストテレス（『デ・アニマ』A 2. 405 a 15）

ただし彼〔アナクサゴラス〕は何にもましてヌース〔知性〕を原理としている。少なくとも彼は、存在するもののうち、ひとりヌース〔知性〕のみは単純で、他と混じり合わず、純粹であるという。そしてヌース〔知性〕が万有を動かすと語るに際して、「認識する」と「動かす」ことの両方ともその同じ原理に付与している。

56

アリストテレス（『自然学』Θ 5. 256 b 24）

それゆえいやしくもヌース〔知性〕を運動の原理とする以上、アナクサゴラスの語るところも正しいのであって、ヌース〔知性〕は非受動的であり、他と混じり合わないとは彼は主張した。なぜなら、それはただそのように不動であることによつてのみ動かし、他と混じり合わないことによつてのみ支配するのだからである。

57

クレメンス（『雑録集』II 14）

アナクサゴラスは事物の上にヌース〔知性〕を置いた最初の人であつた。しかし彼はそれを能動的原因として堅持することをせず、ヌース〔知性〕を何の活動も思惟もせぬものとすると共に、没観念的な渦巻といったものを思い描いている。

58

アリストテレス（『形而上学』A 3. 984 b 15）

そこである人が、ちょうど動物の内にあるように自然の中にもヌース〔知性〕があり、それが世界とそのすべての配列の原因であるといったとき、それ以前のよい加減に語っていた人たちに比べて、この人のみが目醒めた人であるように見えたのであつた。ところで明らかにアナクサゴラスがこういって説いていたことをわれわれは知っているが、彼以前ではクラゾメナイのヘルモティモスがそういって語っていたとすべき理由がある。

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』1185,9）

エウデモスは、アナクサゴラスが運動を、それ以前には存在していなかったにもかかわらず、ある時始まったと語っていることで、アナクサゴラスを非難しているが、そのみならず、それはいつまでつづくのか、あるいはいつ終わるのかということについても、決して明らかでないにもかかわらず、彼は語らずじまいにしているという点でも非難している。「なぜなら、ある時ヌース〔知性〕によって運動するというのなら、またすべてはヌース〔知性〕によって静止すると考えてどうしていけないことがあるのか」とエウデモスはいふ。そしてまた次のことでもエウデモスはアナクサゴラスを責めている。「どうして反対の性状に先立って欠如が存しえようか。ところで静止は運動の欠如であるとするなら、運動の前には存しないことになるだろう。」

アリストテレス（『形而上学』I 6. 1056 b 28）

それゆえ、アナクサゴラスは「すべてのものは多さにおいても小ささにおいても無限であって、一緒にあった」といって事足れりとしたが、正しくない。彼は「小ささにおいても」に代えて、「少なさにおいても」というべきであった。そうすれば、少は、ある人々のいうように、一によってあるのではなく、二によってあるのであるから、〔事物が少なさにおいて〕無限ということはないのである。

アリストテレス（『形而上学』A 2. 1069 b 19）

すべては有るものから生成する。とはいえ、それは可能的に有るものからという意味であって、現実的に有るものからという意味ではない。そしてこれがアナクサゴラスの一なるものであり（「すべては一緒にあった」というよりもこういった方がよいから）、エンペドクレスやアナクシマン드로スの混合体である。

アリストテレス（『形而上学』A 8. 989 a 30 ff.）

もし人がアナクサゴラスは二つの元素を説いていたと解するなら、理に適った理解をしたことになるだろう。… それでもなお、もし人が彼のいわんとするところを総合的に追って行くなれば、恐らくそこに一層新しいことの説かれているのが知られよう。

アリストテレス（『形而上学』A 8. 989 b 16）

そこでこれらのことからして、彼〔アナクサゴラス〕の場合には、一と他を原理として語っていることになる。一というのは、それが単純で未混合だからであり、他というのは、われわれが無規定なものとして立てているごときものであって、規定されて特定の形相を得る以前のものである。

ディオドロス（『世界史』I 7,7）

エウリピデスもまた、彼は自然学者アナクサゴラスの弟子であるが、その彼もまた宇宙全体の本性について上で語られたことに反対でないようにみえる。というのも、彼は『メラニッペ』の中に次のように記しているからである。

〈この話はわたしが作ったものではなく、母から聞いたものだ。〉
つまり天と地はかつてはひとつの形をしていた。
ところが、それが二つに切り離されたとき、
すべてのものを生み、日の光の内に送り出したのだ。
樹々、翼の有るもの、海が養う動物ども、
そして人間の族を。

63

アエティオス（『学説誌』II 1,2 [Dox.327]）

タレス、… アナクサゴラス、プラトン、アリストテレス、ゼノンは、世界はひとつであるとする。

64

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』154,29）

ひと度近づいてきたヌース〔知性〕によって支配され分離されて、混合体から世界が生み出されると、爾後はそのまま存続しつづけるとアナクサゴラスはいう。

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』1121,21）

アナクサゴラス、アルケラオス、キオスのメトロドロスは、時間が始まった後で世界は生まれたと語っているように思われる。彼らはまた運動も始まったという。なぜなら時間が始まる以前には諸存在は静止していたが、ヌース〔知性〕によってその内に運動が生じしめられたと彼らはいうからであり、そしてその運動によって世界は生まれたのである。また彼らは、学説上の整合性から、世界創造の始まりを仮定したように思われる。

65

アエティオス（『学説誌』II 4,6 [Dox.331]）

アナクシマンドロス、アナクシメネス、アナクサゴラス、アルケラオス、ディオゲネス、レウキッポスは、世界は消滅するとする。

66

アエティオス（『学説誌』I 29,7 [Dox.326 b 7 n.]）

アナクサゴラス、デモクリトス、それにストア学徒たちは、〔真の〕原因は人間理性には明らかでないとする。なぜなら、それは必然に基づくこともあれば、運命に基づくこともあり、選択意志に基づくこともあれば、偶然に基づくこともあり、自己偶発に基づくこともあるからである。

アレクサンドロス（『運命について』2）

なぜなら少なくとも彼〔アナクサゴラス〕は、生成するものの何ものも運命によって生じるのではなく、そのような名称は空虚であると語っているからである。

逸名著作家の古注（アリストテイデス『弁論集』II 80,15 Dind. への古注 [Vaticanus graecus 1298]）

またアナクサゴラスは、一般に神々による人間への摂理といったものは存在せず、人間に係わるこ

とはすべて偶然によってもたらされたと語っていた。

67

アエティオス（『学説誌』II 8,1 [Dox.337]）

ディオゲネスとアナクサゴラスは、世界が形成され、動物が土から生み出されてのち、世界は自発的に南の方に若干傾いたという。（それは恐らく摂理によるものであろう。すなわち寒さや炎熱や温暖に応じて、世界のある部分は人が住めないが、ある部分は住めるようになるためである。）

68

アリストテレス（『天体論』Δ 2. 309 a 19）

ところで、空虚の存在を認めない人たちのうち、一方の人々は軽さと重さについて何も規定しなかった。例えばアナクサゴラスとエンペドクレスがそうである。

アリストテレス（『自然学』Δ 6. 213 a 22）

ところで、空虚の存在しないことを証明しようと試みる人たちは、人々が空虚という言葉で語ろうとしているもののものを反駁することはしないで、彼らが「空虚でないものを空虚と」誤って語っているということを反駁しているだけである。例えばアナクサゴラスや、その他、そのような仕方でも論駁している人たちがそうである。というのも、彼らが示して見せていることは、空気が何ものであるということであって、そのために彼らは革袋をふくらませて空気が強力なものであることを示したり、クレプシュドラ〔水取り器〕の中に空気を閉じ込めたりしているのである。

69

擬アリストテレス（『問題集』16,8. 914 b 9 ff.）

クレプシュドラ〔水取り器〕に係わって起こる現象の原因の大体はアナクサゴラスが語っているようなことであると思われる。けだし管が閉じられている場合、水が中に入っていないのはクレプシュドラの中に閉じ込められている空気がその原因だからである。だが単にそれのみが原因なのではない。なぜなら、横向きにしてそれを水の中に浸す場合には、管を閉じていても水は入ってくるからである。それゆえそれがどういう仕方でも原因となっているのか、十分に語られていないのである。だが先にも述べたように、空気が原因であることは確かである。さて空気というものは、押されたり、それ自ら動く場合には、そして強制されて動くのでない場合には、直線的に運動する性質を有している。これは他の元素も同様である。そこでクレプシュドラが横向きに浸される場合には、水の下にとどまっている空気も水の中の孔とは反対の孔〔水面よりも上の孔〕を通して真つすぐ出て行くのであり、そしてそれが退いた後に水が入ってくるのである。しかしクレプシュドラが垂直に水に浸される場合には、上部が塞がれているために空気は垂直方向に退けず、水も〔下の〕最初の孔付近にとどまることになる。というのも、自らの内へ凝縮するという性質は空気にはないからである。さて動かすことのできない空気が水をも締め出す力を有することは、クレプシュドラそのものにおいて見られる現象がその証拠となる。けだしクレプシュドラの胴を水で一杯にし、管を閉じた上で管を下にひっくり返しても、水は管を通してその口から流れ出ないからである。口を開くと水は管を流れ出るが、しかし即にはなく、少し遅れてである。それは水が管の口のところまできておらず、〔口を〕開いた後、管を通して〔そこまで〕やってくるからである。クレプシュドラが〔水で〕一杯になっていて、しかも直立している場合には、管が開かれると、即、水は濾孔を通して流れ出る。それはその濾孔に水が接してい

たためであるが、管の先端には接していなかったのである。さて水がクレプシュドラに入っていないのは以上に述べた理由によるが、他方、管を開いたとき出て行くのは、管内の空気（それは上下に運動する）がクレプシュドラ内の水に多大の空虚〔空の部分〕を作り出すためである。下に押されたり、自らその方向に向かうことによって〔クレプシュドラ内の空気は〕当然流れ出るが、〔そのことによって〕クレプシュドラの外の空気が押しのけられて動かされる。この外部の空気は力の点ではそれを押しやる空気〔内部の空気〕と等しいのであるが、抵抗力という点でそれより力が劣るのである。それは狭い管を通る空気はより速く、より激しく流れて、水にぶつかるからである。また管に蓋をした場合に水が流れ込まないのは、クレプシュドラの中に入る時、水が空気を力づくでクレプシュドラの外へ押し出そうとするが〔それができないのが〕原因である。クレプシュドラ内に生じる気泡やぶくぶくという音はその証拠である。水が入ってくる際に空気が力づくで押し出されるなら、水はクレプシュドラの管の中にまで侵入してきて、ちょうど閉じ込められた木とか隙間に挟まった銅のように他につなが止めるものがまったくなくとも、そこにとどまる。だがちょうど木の中で折れた釘を打ち出す場合のように、反対側から追い出される時には〈容易に跳び出す〉。管を開いた時このことが起こるのは、先に述べたような理由から結果することである。そこで以上の理由からして、空気が膨張して力づくで阻止している時に水が流れ出て行くことがないのは当然なわけである。氣息によって水が引き上げられていることは、音が示している。これは多くの場合に見られる現象である。引き上げられている時、水は連続体であるからして、水全体が空気によって圧迫されて、再び空気によって追い出されるまで、そこにとどまりつづける。水は一にして連続であるから、その最初の部分がとどまるなら、それにつづく他の部分も宙にとどまるのである。

70

テオプラストス（『感覚論』59 [Dox.516]）

アナクサゴラスが空気とアイテールを区別するように、稀薄で薄いものは温かく、濃密で厚いものは冷たい。

71

アエティオス（『学説誌』II 13,3 [Dox.341]）

アナクサゴラスは、〔世界の〕周辺部を取り巻くアイテールは実体においては火であるとする。それがその旋回運動の力によって大地から石を巻き上げ、それらに点火して諸星としたのである。

72

アエティオス（『学説誌』II 20,6 [Dox.349]）

アナクサゴラスは、太陽は灼熱したミュドロロン〔鉄塊〕か石であるとする。

アエティオス（『学説誌』II 21,3 [Dox.351]）

アナクサゴラスは、〔太陽は〕ペロポネソス半島の何倍もあるとする。

アエティオス（『学説誌』II 23,2 [Dox.352]）

アナクサゴラスは、極点の空気（それは濃縮化によって密集し、自らを強化している）の反発力によって〔太陽の回帰は〕起こるとする。

クセノポン（『ソクラテスの思い出』IV 7,6 ff.）

要するに、神はどんな風にして天界の諸現象のそれぞれを操っているのか、そういったことの詮索者となることに彼〔ソクラテス〕は背を向けたのである。…そういったことに沈思する者は、神々の造りたもうた仕組みを解明することに多大の思惟を傾注したアナクサゴラスが正気を逸したのに少しも劣らず、正気を逸する危険を冒すものだとは彼はいつていた。(7) というのも、この人〔アナクサゴラス〕は火と太陽を同じものとしながら、一方、火は人間が容易に見ることができるのに、太陽は真っすぐ見ることができないということを見逃しているし、また太陽によって照らされると肌が黒くなるのに、火によってはそういうことはないということを見逃しているからである。また彼は、大地から生え出るものの何ものも太陽の光がなくては正常に成長することができないのに、火によって熱せられるとことごとく枯れてしまうということも見逃している。さらにまた彼は、太陽は灼熱した石であると主張して、火中の石は光りもせず、長く持ちこたえることもないのに、太陽は何にもまして明るく輝きながら全時間を通して存続しつづけるということを見逃しているからである。

アリストテレス（『天体論』A 3. 270 b 24）

アナクサゴラスはしかしこの名称〔アイテールという名称〕をうまく用いていない。というのも、彼は火のことを「アイテール」と呼んでいるからである。

シンプリキオス（『アリストテレス「天体論」注解』119,2）

アイテールという名称は燃やすことを意味する「アイテイン」（αἰτεῖν）に由来するとし、それゆえそれを火にかけて用いるアナクサゴラスのエテュモロジーを彼〔アリストテレス〕は正しくないと非難しているからである。

擬アリストテレス（『問題集』11,33. 903 a 7）

昼間よりも夜、物音がよく聞こえるのはなぜであろうか。それは、アナクサゴラスもいうように、昼間は空気が太陽によって熱せられてシュー、シューと音を立てるが、夜は熱が去って静かになるからであろうか。

プルタルコス（『食卓歓談集』VIII 3,3. 722 A）

アナクサゴラスは、人々が塵埃と呼んでいる光の中を絶えず通過して行く小さな屑や破片において明らかであるごとく、空気は太陽によって動かされ、微動や振動を得ると語っている。そこでこれらの空気が熱のために昼間はシュー、シューと音を立てて、その音によって音声を聞きにくくするが、夜にはそれらの振動や響きは和らぐと彼はいうのである。

プロクロス（『プラトン「ティマイオス」注解』III 63,26 D.）

プラトンは…宇宙内におけるそれら〔月と太陽〕の運行は連携し合っていると教えている。だがこの仮説の創始者はプラトンではなく、エウデモスの伝えるところによると〔アナクサゴラスであって〕、アナクサゴラスが初めてそういったことを想定したとのことである。

プラトン（『クラテュロス』 409 A）

かの人〔アナクサゴラス〕が最近語った説、すなわち月はその光を太陽から得ているという説は
…。

プラトン（『クラテュロス』 409 B）

アナクサゴラスの徒のいうことがもし真実だとするなら、この光は月の周りで常に新しくもあり、古くもあるようだ。なぜなら、太陽が常に月の周りを巡りながら、絶えず新しい光を投げかけるであろうし、また先月の古い光もそこには現存しておろうからである。

逸名著作家の古注（アポロニオス『アルゴナウティカ』 I 498 への古注）

月は平らな土地であると、その同じアナクサゴラスは主張しており、そこからネメアのライオンは落ちてきたと考えられているのである。

アエティオス（『学説誌』 II 25,9 [Dox.356]）

アナクサゴラスとデモクリトスは、〔月は〕灼熱した固体であって、そこには平野や山や峡谷があるとする。

アキレウス・タティオス（『アラトス「天象譜（パイノメナ）」入門』 21 p.49,4 M.）

またある人たちは〔月は〕固体の燃え上がる土であって、火を有するとする。だがその別の居住地には川とか〔その他〕地上にあるものすべてがあり、そこからネメアのライオンは落ちてきたのだと語っている。

アエティオス（『学説誌』 II 30,2 [Dox.361]）

アナクサゴラスは〔月は〕冷を混じたものと土によって構成された不均一な複合体であるとする。そのあるところは高く、あるところは低く、あるところは窪んでいる。そして暗いものが火と混合されているが、それらのあり様が陰に見えるのである。そこからその星〔すなわち月〕は借りものの輝きといわれるのだと彼はいう。

アエティオス（『学説誌』 II 28,5 [Dox.358]）

タレスが初めて〔月は〕太陽によって照らされているといった。… アナクサゴラスも同意見。

アエティオス（『学説誌』 II 29,6-7 [Dox.360]）

タレス、アナクサゴラス、… などは、数学者たち〔天文学者たち〕と一致して、〔月が〕月毎に姿を隠すのは、それが太陽と一緒に運行し、その周囲を照らされるためであるとする。また月蝕は月が大地の陰の中に入り込むことによって起こる。すなわち大地が両天体〔太陽と月〕の間になって、月が〔その大きさ〕以上に遮られるのである。テオプラストスのいうところによれば、アナクサゴラスは時には月より下の物体が前に立ちはだかることもあったとした。

アエティオス（『学説誌』II 16,1 [Dox.345]）

アナクサゴラス、デモクリトス、クレアンテスは、天体はすべて東から西へ運行するとする。

アキレウス・タティオス（『アラトス「天象譜（パイノメナ）」入門』1,13 p.40,26 M.）

アナクサゴラスもデモクリトス（『大宇宙』において）も、天体を生き物とは考えていない。

アリストテレス（『気象論』A 8. 345 a 25）

アナクサゴラスとデモクリトスの徒は、天の川は一部の星の光だという。すなわち太陽は、大地の下を移動しているときには、星の一部を照らさない。ところで太陽によって照らされている限り、それらの光は眼に見えないが（太陽の光線によって妨げられるから）、大地が遮り、その結果太陽によって照らされなくなった諸星の固有の光が天の川であると彼らはいうのである。

アエティオス（『学説誌』III 1,5 [Dox.365]）

〔天の川について〕アナクサゴラスは、太陽が大地の下になって、周囲全体を照らさなくなった時、大地の影が天のその部分に落とされるのだという。

アリストテレス（『気象論』A 6. 342 b 25）

〔彗星について〕さてアナクサゴラスとデモクリトスは、彗星は、〔二つの〕惑星が接近し、互いに接触すると思われるときの、それらの惑星の〔光の〕合であるという。

アエティオス（『学説誌』III 2,2 [Dox.366]）

アナクサゴラスとデモクリトスは〔彗星は〕二つないしはそれ以上の星の光の融合に基づく合であるとする。

アエティオス（『学説誌』III 2,9 [Dox.367]）

アナクサゴラスは、いわゆる流れ星はアイテールから火花のように流れ出たものであるという。それゆえ即座に消えるのである。

セネカ（『自然研究』VII 5,3）

カルマンデルもまた彗星について記した彼の書物の中で、大きさが大型の梁ほどもある巨大で異常な光が天空に〔現れたのが〕アナクサゴラスによって観察されたといっている。しかもそれは幾日も輝いていたという。

アリストテレス（『気象論』B 9. 369 b 14）

〔電光と雷鳴について〕またアナクサゴラスによれば、それ〔電光〕は上方のアイテールの一部で

あり、実際彼はそれ〔アイテール〕を火と呼んでいる。それが上から下方へ落下してきたものなのである。すなわちこの火の閃光が電光であり、またシュという雷鳴はそれが雲の中に消えるときに発する音である。したがって〔われわれに〕現れる通りの順で実際にも起こっているのであり、電光が雷鳴に先行しているのである。

アエティオス（『学説誌』III 3,4 [Dox.368]）

熱いものが冷たいものの中に落ち込んだとき（すなわちアイテールの一部が空気の中にとということであるが）の、その音によって雷鳴を、雲の暗さと対比したその色によって電光を、光の多量さと大きさによって雷を、より多量の粒子からなる火によって烈風を、それが雲を巻き込むことによって竜巻〔プレステール〕を、彼は生じさせている。

セネカ（『自然研究』II 12,3）

それ〔火〕はアイテールから滴り落ちてきるとアナクサゴラスはいう。そしてまた天空のそういった火焰から多くのものが落下してくるが、それらを雲が含み込んで長時間保持するという。

セネカ（『自然研究』II 19）

アナクサゴラスは、そういったことのすべてが生じるのは〔上空の〕アイテールから一部の力が下方に降下してくることによってであるという。かくて火が冷たい雲に打ちつけられたとき、音を発する。そして雲を引き裂くとき、光を発する。火の比較的小さい力は稲光を作り、大きな力は雷を作る。

85

アエティオス（『学説誌』III 4,2 [Dox.371]）

雲と雪は、アナクサゴラスも〔アナクシメネスと〕大体同じような仕方で説明する。雹は氷結した雲からその一部が地上に向って押し出されて降ってきたものである。すなわち落下中に冷却されて球状になるのである。

アリストテレス（『気象論』A 12. 348 b 13）

〔雹について〕なぜなら彼〔アナクサゴラス〕は雲が冷たい空気の中へ上昇して行く時にそのような状態になるというが、われわれは暖かい空気の中へ下降してくる時であるとするからである。

アリストテレス（『気象論』A 12. 348 a 14）

そこである人たちは〔水の〕このあり様と〔雹の〕生成の原因を次のように考えている。雲が高いところに押し上げられると、そこには大地からの光線の反射がとどかないためにその場所はより冷たく、そこまで達した水は氷結するのである。それゆえ雹は夏に、また暖かい地方で一層多く発生するが、それは熱が地上から雲を一層広範に押し上げるからである。

86

アエティオス（『学説誌』III 5,11 [Dox.373]）

〔虹について〕アナクサゴラスは、太陽の輝が濃密な雲に反射したものであるとする。そしてそれは例外なくその像を生み出す天体〔太陽〕の真正面に位置する。また彼は黒海において見られるいわゆるパレリオン〔幻日〕を同じような仕方で説明している。

逸名著作家の古注（アイスキュロス『プロメテウス』88 への古注A [ed.Dindorf (Oxon.1851) III 181,30]）

風は、アナクサゴラスによれば大地から生じ、ホメロスによれば「父なるゼウスの雲から」生じる。アナクサゴラスは風の質料的原因をいっているのであり、他方ホメロスは能動的原因、というよりはむしろ、質料因と能動因の両原因を語っているのである。

〔中世写本の書き込み〕（天文学書からの抜き書き：Cod.Vatic.381 [アラトス『天象譜（パイノメナ）』ed.Maass, p.143]）

大地は、デモクリトスのいうように空洞でもなければ、アナクサゴラスのいうように平板でもないからである …。

アリストテレス（『天体論』B 13. 295 a 9）

したがって今大地が静止しているのが強制によることであるとするなら、渦によって真中に集まったのもまた〔強制による〕のである。すべての人がこうした原因を語るのは、液体中や空気の周りで起こる現象からしてである。なぜならそれらの中では常により大きいものやより重いものが渦の中心に向って行くからである。それで天界を生成したとする人たちはみな、そういった理由から大地もまた中心に集まったというのである。

シンプリキオス（『アリストテレス「天体論」注解』511,23）

大多数の人が、大地は中心に位置すると語っている。エンペドクレス、… アナクサゴラスが、そうである。

シンプリキオス（『アリストテレス「天体論」注解』520,28）

大地は下にある空気によって支えられて静止するという人たちがいる。大地は平板で太鼓の形をしているために空気を覆い、それが逃げることを許さないのだと彼らはいうのである。アナクシメネス、アナクサゴラス、それにデモクリトスが、このような主張をしたと思われる。

アリストテレス（『気象論』B 7. 365 a 14）

〔大地の振動と運動について〕さてアナクサゴラスは、アイテールは本性上上方へ行く性質を有するが、それが大地の下空洞の中に入り込むと、大地を動かすという。すなわち、大地の全体は本性上海綿に似ているが、その表面が雨によって塞がれてしまうと、そういうことが起こるのである。というのも、大地全体には上の部分と下の部分があって、その上の部分はわれわれの住んでいるところであるが、反対側は下になるからである。

アリストテレス（『気象論』B 7. 365 a 31）

また大地はその大きさのゆえに空気の上にとどまるといったり、下から上に突き上げられてその全

体が揺れ動くと主張するのは、バカげている。しかも彼は地震に伴って起こる現象については何ひとつ説明を与えていないのである。

アエティオス（『学説誌』III 15,4 [Dox.379]）

〔大地の振動〔地震〕について〕アナクサゴラスは、〔大地の〕表面が密な場合、侵入した空気がそれとぶつかるが、それが解けると覆うもの〔大地〕を振動によって揺り動かすことができなくなるという。

セネカ（『自然研究』VI 9,1）

火が〔大地の〕運動〔地震〕の原因であるとある人たちは判断しているが、ある人たちはそれを唯一の原因とはしない。特に大気も大地もほぼ同様の原因から揺り動かされると考えるアナクサゴラスがそうである。すなわち地下のかなり深い部分で、氣息が雲の中に密集した分厚い空気を、われわれのもとにおいても曇り空がそれでもって破られるのが常であるのと同じ力でもって、引き裂くのである。そしてこの雲の衝突と押し出された空気の突進から火が発火する。この火自体が出口を求めて出会うものの中に突入して行き、妨げるものを引き裂く。そして遂には狭いところを通して空中に出て行くための通路を手に入れるか、あるいは力や暴行によってそういった通路を作るのである。

90

アエティオス（『学説誌』III 16,2 [Dox.381]）

〔海について、それはどのようにして出来たのか。またどうして辛いのか〕アナクサゴラスは、最初澱んで水溜まりを作っていた水分が太陽の巡りによって焦がされ〔乾かされ〕て、その最も微細な部分が蒸発し、残りが沈澱して塩分を含んだ辛いものになったという。

アレクサンドロス（『アリストテレス「気象論」注解』67,17 [Dox.495]）

海に関する第三の見解はこうである。つまり大地によって濾過されると同時に大地を浄化することによって、水は塩辛いものになるということである。それは大地がそれ自身の内にそのような味を含んでいるからである。また大地の内に塩とニトロン〔ソーダ、炭酸ナトリウム〕が埋まっていることもその証拠とされた。大地はその多くの場所で刺激的な味がするのである。アナクサゴラスとメトロドロスがこういった見解を抱く人たちであった。

〔参照〕**ガレノス**（『ヒッポクラテス「流行病」注解』のアラビア語訳より：CMG v 10,1）

水は火や太陽が過度に熱すると、いわば塩味を帯びる傾向のあることはわれわれの見るところであるが、ただし水の種類によって塩味を帯びる点でその当初の自然本性からして相違がある。すなわち、熱せられるとすぐさま塩味を帯びる水、したがってその中でもともと塩分が優勢であった水は人の飲めないものである。アナクサゴラスはこの味を「ニトロンの」と呼んでいるが、それはニトロン〔ソーダ、炭酸ナトリウム〕という言葉からである。というのも、ニトロンは塩でもあるからである。ヒッポクラテスはこの味について、それは熱によって産み出されるものであるが、しかしそれを産み出す熱は苦さを産み出す熱ほどには過度でないといっている。しかしこの点に、この味を「ニトロンの」と称するのは正しくないことの証明があるのである。ニトロンに含まれる苦さは塩の辛さを凌駕しているからである。この味を最も適切な名称でもって表現したのはヒッポクラテスとプラトンである。すなわちヒッポクラテスはそれを「塩分に富んだ」といい、プラトンは「塩味のある」といって

いる。

91

アエティオス（『学説誌』IV 1,3 [Dox.228,385]）

〔ナイル河の増水について〕アナクサゴラスは、アイティオピア〔エティオピア〕の雪が、冬には凍結しているが、夏に溶け出すからであるとする。

セネカ（『自然研究』IV a 2,17）

エティオピアの峰から溶け出した雪がナイル河まで流れ下るのだとアナクサゴラスはいう。昔の人はみんなその見解に与していた。アイスキュロス〔『救いを求める女たち』559、断片300 Nauck〕、ソポクレス〔断片797〕、エウリピデス〔『ヘレネ』3、断片228〕がそう伝えている。

〔上述の見解に対して〕ヘロドトス（『歴史』II 22）

第三の〔説明の〕仕方は、もっともらしいところもあるが、とりわけ虚偽を語るものである。というのも、その語るところはまったく無意味であり、ナイル河の流れは溶けた雪によるものだと主張するのである。

92

テオプラストス（『感覚論』27 ff. [Dox.507]）

アナクサゴラスは〔感覚は〕反対のものによって生じるとする。同じものが同じものによって作用されても、感じないからである。ところで各感覚においては〔それぞれ〕独自の仕方では識別しようとする。すなわち〔例えば〕見るということは瞳の映像による。だが同じ色の内に映ずるのではなく、異なる色の内に映ずるのである。ところで、多くのものにあつては昼間色の異なる状態にあるが、若干のものにおいては夜間にそのような状態にある。それゆえ夜視力が鋭くなるのである。一般的にはしかし夜の方が眼と同じ色であることが多い。昼間〔よりよく〕映ずるのは、光が映像の補助原因となるからである。顕著な色は常に一層はっきりと異なる色に映える。(28)触覚や味覚も同じ仕方では判別する。なぜなら同じ程度に温かいものや冷たいものは近似的なものを暖めも冷やもしないからである。また甘さや苦さを認知するのは同じものによってではない。温かいものによって冷たいものが、塩辛いものによってまろやかなものが、苦いものによって甘いものが、それぞれの欠けるところによってそれぞれ認知されるのである。なぜなら〔これらの〕すべてはわれわれの中で起こることであるからと彼はいう。臭いを嗅ぐことも音を聞くこともこれと同じ仕方ではなされるが、前者は呼吸と共にであり、後者は音が脳に達することによってである。というのも、包む骨が空洞になっており、そこに音が落ち込むからである。(29)「感覚にはすべて苦痛が伴う。」これは以上の仮説に伴うものと考えられよう。同じでないものはすべて、接触するとき、苦痛を与えるからである。このことは長時間の場合とか、過度の感覚の場合に明瞭である。すなわち明るい色や度を過ぎた音は苦痛を生むし、同じものを長時間感覚しつづけることはできないのである。また大きな動物ほど感覚能力も大きく、一般に感覚は〈感覚器官の〉大きさに応じる。なぜなら、大きく清らかで明るい眼を持つものは大きなものを遠方から見て取るが、小さな眼をしたものはそれと反対だからである。聴覚の場合も同様である。(30)すなわち、大きな動物は大きなものや遠方のものは聞き取るが、比較的小さな音は聞き逃すのに対して、小さな動物は身近の小さな音を聞き取る。嗅覚の場合も同様である。微細な空気が一層匂うが、温かいもの、稀薄なものが臭いを放つからである。そして大きな動物が呼吸するときには

稀薄なものと共に濃密なものも吸い込むが、小さな動物は稀薄なものしか吸い込まない。それゆえに大きな動物の方が一層よく感覚するのである。というのも、臭いは遠方よりも近くで一層臭うが、それはより濃密となるからである。分散すると、それは弱まるのである。大きな動物は「微細な空気」を、小さな動物は濃密な空気を、いわばほとんど感覚しない。・・・

(37) さて、以上に述べたごとく、アナクサゴラスはこういったいわば一般化した古き見解を取り上げているに過ぎないのである。ただし彼はすべての感覚についてその特徴点を語っており、とりわけ視覚について語っているが（その感覚対象が膨大だから）、身体的要素のより大きな感覚については明らかにしていない。・・・ (59) というのも、アナクサゴラスはそれらについては〔すなわち色については〕大まかに語っているに過ぎないからである。

93

アエティオス（『学説誌』IV 3,2 [Dox.387]）

〔魂は物体であるか。またその実体は何であるか〕アナクシメネス、アナクサゴラス、アルケラオス、ディオゲネスは、空気だとする。

アエティオス（『学説誌』IV 5,11 [Dox.392]）

ピュタゴラス、アナクサゴラスは、ヌース〔知性〕は外から引き入れられたとする。

アエティオス（『学説誌』IV 7,1 [Dox.392 n.]）

ピュタゴラス、アナクサゴラス、ディオゲネスは、魂は不滅であると主張した。

94

アリストテレス（『ニコマコス倫理学』H 15. 1154 b 7）

なぜなら動物は常に苦痛を感じているからである。見ることや聞くことは苦しみであると主張している自然学者たちが証いしているように。

アスパシオス（『アリストテレス「ニコマコス倫理学」注解』156,14）

なぜならアナクサゴラスが動物は常に感覚によって苦痛を感じていると語っているからである。だがアリストテレスはこのことに賛成して語っているのではなく、記録として伝えているのである。少なくとも彼ら〔アリストテレスおよびテオプラストス〕は動物が常に苦痛の状態にあるとは考えていなかったからである。テオプラストス〈もまた〉『倫理学』において述べている〈ように〉、〔アリストテレスは〕アナクサゴラスを非難して、快楽はそれと反対の苦痛を駆逐すると語っている。

アエティオス（『学説誌』IV 9,16 [Dox.398]）

アナクサゴラスは、感覚はすべて苦痛を伴うとする。

95

キケロ（『アカデミカ第二』I 12,44）

それらの不分明さのためにソクラテスは、またソクラテス以前にもすでにデモクリトスやアナクサゴラスやエンペドクレスが、無知を告白するにいたったのであり、ほとんどすべての古人が、何ものも認識しえず、何ものも知覚しえず、何ものも知りえないと語ったのである。感覚は狭く、精神は無

力であり、人生航路は短い。そしてデモクリトスもいうように、真理は深き淵に沈んでいる。すべては思惑と習慣によって捉えられているに過ぎず、真理には何も残されておらず、すべては闇に取り囲まれていると彼らはいうのである。

96

アエティオス（『学説誌』IV 9,1 [Dox.396]）

アナクサゴラス、デモクリトス … は、感覚は偽であるとする。

97

セクストス・エンペイリコス（『ピュロン主義哲学の概要』I 33）

思惟によって捉えられるものを現れに対立させるというのは、例えばアナクサゴラスが「雪は白い」に対して、「雪は凍った水である。しかるに水は黒い。ゆえに雪は黒い」を対立させたようなものである。

キケロ（『アカデミカ第一』II 31,100）

雪が白いことを認めるのは、彼〔カルネアデス〕の方がアナクサゴラスより容易であろう。だがアナクサゴラスは雪がそういったものであることを否定したのでは決してなく、彼の場合には、水が黒いということ、そして雪はその凍ったものであることが分かっている以上、それが白いものであるとはどうしても思えないとしたのである。

98

逸名著作家の古注（ホメロス『イリアス』XVI 161 への古注（A））

「黒き水」アナクサゴラスによれば、水は元々黒いからである。少なくとも木に含まれた水分から立ち昇る煙は黒い。

98 a

プセロス（『石について』26）

石〔磁石〕において見られるこれらの力の原因を多くの人が勇気をもって説明した。昔の知者の中では、アナクサゴラスとエンペドクレスとデモクリトスが … 。

99

アリストテレス（『デ・アニマ』A 2. 404 a 25）

同様にアナクサゴラスもまた、動かすものは魂であると語っている。そしてまた「ヌースが万有を動かした」といった人が他にもいるなら、その人もそうである。

100

アリストテレス（『デ・アニマ』A 2. 404 b 1）

アナクサゴラスはそれらの点について十分明らかにしたとはいえない。というのも、彼は物事が美しくあり正しくあることの原因はヌース〔知性〕であると多くのところで語りながら、別のところでは魂であるといっているからである。すなわちヌース〔知性〕は、大小貴賤を問わず、すべての動物の内に存するというのである。だが少なくとも思慮という意味で語られるヌース〔知性〕はすべての

動物に同じように属すると思われたいし、人間ですらすべての者に具わるとは思えないのである。

アリストテレス（『デ・アニマ』A 2. 405 a 13）

アナクサゴラスは魂とヌース〔知性〕を別のものとして語っているようにも見える。…だが両者をひとつの本性のものとして使っている。しかしとにかくも、ヌース〔知性〕を万物の原理としている。少なくとも彼は、存在するもののうち、そのみが単純で混合しておらず、純粹であるという。そして「ヌース〔知性〕が万有を動かす」と語っているところからして、彼はこの同じ原理に「認識する働き」と「動かす働き」の両方とも付与しているのである。

アリストテレス（『デ・アニマ』A 2. 405 b 19）

だがアナクサゴラスのみが、ヌース〔知性〕は影響を受けざるものであり、他のものと共通するところ何ひとつないという。

アリストテレス（『デ・アニマ』Γ 4. 429 a 18）

したがってそれ〔ヌース〕は、すべてのものを知るのであるから、アナクサゴラスもいうように、「〔万物を〕支配するために」、すなわち認識するために、未混合でなければならない。

101

アエティオス（『学説誌』V 20,3 [Dox.432]）

アナクサゴラスは、すべての動物が活動するロゴス〔理性〕を有するが、受動的理性とでもいうべきもの、いわゆるヌース〔知性〕の通訳者は有さないとする。

101 a

プセロス（『万般の学説について』15）

アナクサゴラスは、思慮という意味でのヌース〔知性〕がすべての人間に具わるわけではないとしているが、それは思惟的本質を有さないという意味ではなく、必ずしも常にそれを使用しているわけではないという意味においてである。魂が「動かす働き」と「認識する働き」という二つの点で性格づけられているのである。

102

アリストテレス（『動物部分論』Δ 10. 687 a 7）

ところでアナクサゴラスは、動物の中で人間が最も賢明なのは手を持つがゆえであるという。だが最も賢明であるがゆえに手を得たといった方が理に適っているであろう。というのも、手は器官〔道具〕であって、自然は常に、賢明な人のなすように、使うことができるものにこそそれぞれの器官〔道具〕を分け与えるのだからである。

103

アエティオス（『学説誌』V 25,2 [Dox.437]）

アナクサゴラスは、身体的な活動の疲労によって睡眠は生じるとする。なぜなら〔疲労の〕状態は身体的なものであって、魂に係わることはないからである。また魂の分離が死である。

ガレノス（『自然的諸機能について』Ⅱ 8）

なぜなら、もしこの問題提起が適切であるとするなら、なぜわれわれは血液についても、それは体内において生成を得るのか、それとも、同質素を想定する人たちのいうように、食物の内に〔元々〕含まれていたのか、探求しようとしないのであろうか。

アリストテレス（『動物部分論』Δ 2. 677 a 5）

アナクサゴラス一派の人々が、急性疾患の原因は胆汁であると想定しているのは正しくないように思われる。彼らは過剰になると胆汁が肺や血管や肋骨に向かって噴き出してくるとするのである。しかしこうした病気の症状をきたした人たちはほとんどおしなべて胆汁を有していないのであり、そのことは解剖しておれば明らかになっていたであろう。

アエティオス（『学説誌』Ⅳ 19,5 [Dox.409]）

アナクサゴラスは、音声が生じるのは氣息が固まった空気に衝突することによってであるとする。衝撃がはね返って聴覚まで達するのである。いわゆる木霊もまたそのようにして生じる。

アリストテレス（『動物発生論』Δ 1. 763 a 30）

ある人たちは、その対立〔雌雄の対立〕は種子の中に始めから存在するという。例えばアナクサゴラスがそうであり、別の自然学者もそういつている。すなわち種子は雄から生じ、雌は場所を提供するのであるが、雄の種子は右から、雌の種子は左からであり、子宮についても、雄の種子は右側に宿り、雌の種子は左側に宿るというのである。

ケンソリヌス（『生誕の日について』6,1 [Dox.190]）

〔胎児において最初形成されるものは何か〕アナクサゴラスによれば脳であり、それによって一切の感覚が成立する。

ケンソリヌス（『生誕の日について』6,2 [Dox.190]）

アナクサゴラスにしたがって、天空の熱が〔われわれの内にも〕あって、それが肢体を司っていると考える人たちがいる。

ケンソリヌス（『生誕の日について』6,3 [Dox.191]）

なぜならアナクサゴラスや、その他多くの人たちが、栄養は臍によって管理されていると見なしているからである。

アエティオス（『学説誌』V 7,4 [Dox.420]）

アナクサゴラスとパルメニデスは右側の〔睾丸からの種子〕は子宮の右部分に蒔かれ、左側のそれは左側に蒔かれるとする。種蒔きのそれを取り換えられると、雌が生まれる。

ケンソリヌス（『生誕の日について』6,6）

種子が右側から出るときには男の子が生まれ、左側からのときには女の子が生まれるという点ではアナクサゴラスとエンペドクレスは一致する。この点については彼らの見解は一致するのであるが、子供たちが〔両親に〕似るという問題については相違するのであって、この問題に関するエンペドクレスの見解は整然と論じられていて、以下のごとくである。両親の種子の中で熱さが等しい場合には父親に似た男の子が生まれ、冷たさが等しい場合には母親に似た女の子が生まれる。父親のが熱く、母親のが冷たい場合には、母親の顔つきを再現するような少年となるであろう。それに対して母親のが熱く、父親のが冷たい場合には父親に似た少女が生まれるであろうという。

ケンソリヌス（『生誕の日について』6,8）

しかしアナクサゴラスは、子供はより多くの種子を付与した側の親の姿を再現すると考えた。

アエティオス（『学説誌』V 19,2 [Dox.430]）

エピクロス一派の人々は・・・動物は相互の転化によって生まれるとする。なぜなら、アナクサゴラスやエウリピデスもまたそう考えるように、それらは宇宙の部分だからというのである。すなわち、
生じたものは何ひとつとして滅びることなく、
あるものから他のものへと分離しつつ、
異なる姿を現すのだ。

〔参照〕エウリピデス（『クリュシッポス』断片839 N.）

広大なる大地とゼウスの天空〔アイテール〕。
天空〔アイテール〕は人間どもと神々の父なりき。
他方、大地は潤いもたらす雨の滴を
受け取って、死すべきもののどもを生み出す。
また肉食たる獣の種族を生む。
されば、それが万物の母と見なされても、
不当ではない。
大地から生い出たものは大地へと、
また再びその道をとって返し、
天空〔アイテール〕の血筋から発したものは
天の蒼穹へと再び戻り行く。
生じたものは何ひとつとして滅びることなく、
あるものから他のものへと分離しつつ、
異なる姿を現すのだ。

エイレナイオス（『異端派論駁』II 14,2 [Dox.171]）

しかしアナクサゴラスは（彼はそれゆえに「無神論者」という異名で呼ばれたのであるが）、動物は天空から地上に落ちてきた種子によって作られたという説を唱えた。

アリストテレス（『動物発生論』Γ 6. 756 b 13）

なぜなら、カラスやイービス〔トキの一種〕は口で交接するとか、四足獣の中ではイタチが口で出産すると語っている人たちがいるからである。すなわちアナクサゴラスや、その他、幾人かの自然科学者がそのようなことをいっているが、いかにも単純で無考な説をなすものである。

アリストテレス（『呼吸について』2. 470 b 30）

アナクサゴラスとディオゲネスは、すべてのものが呼吸すると主張し、魚や貝についても、それらがどのような仕方では呼吸しているか語っている。アナクサゴラスは、鰓を通して水を放出するとき口の中に空気が生じるが、その空気を吸って魚は呼吸しているという。というのも、空虚といったものはないからであると。

プルタルコス（『自然学的諸問題』1. 911 D）

植物は大地に生えた動物であると、プラトン、アナクサゴラス、デモクリトス一派の人々は考えている。

テオプラストス（『植物誌』III 1,4）

アナクサゴラスは、空気は万物の種子を含んでおり、それら種子が水に落ちて混じることにより植物が生まれるとする。

擬アリストテレス（『植物について』A 1. 815 a 15）

しかしアナクサゴラス …… らは、それら〔植物〕は欲求によって動かされるといい、また感覚もするし、悲しんだり喜んだりすると主張している。そのうちアナクサゴラスは、それら〔植物〕は動物であって、喜びを現したり悲しんだりするといい、葉が落ちることをその証拠としている。

擬アリストテレス（『植物について』A 1. 815 b 16）

しかしアナクサゴラス …… らは、それら〔植物〕も知性や理解力を持っているとした。

擬アリストテレス（『植物について』A 2. 816 b 26）

もっともアナクサゴラスはそれ〔植物〕も呼吸するといっているが。

擬アリストテレス（『植物について』A 2. 817 a 23）

そして植物の栄養の源は大地にあり、果実の生成の源は太陽にある。それゆえにアナクサゴラスは

「植物の冷たさは空気による」といったのであり、またレキネオンは「大地は植物の母、太陽は父」というのである。

B 著作断片

アナクサゴラスの『自然について』第1巻、第2巻、[第3巻?]

1

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』155,23）

アナクサゴラスは、一なる混合体から数において無限の同質素が分離してくるという。そしてすべてのものの中にすべてのものがあるのであるが、それぞれのものは優勢となることによってその性格を現すとする。彼はこのことを『自然学』の第1巻の冒頭のところで明らかにし、次のように語っている。「すべてのものは一緒にあった。そして数においても小ささにおいても無限であった。なぜなら小さいということも無限だったからである。そしてすべてが一緒にあったから、何ものも小ささによって明らかとはなっていなかった。というのも、万有は空気とアイテールを包み込んでいたが、[空気とアイテールの]両方とも無限であったからである。すなわちそれらはすべてのものの中に、数においても大きさにおいても、最大限含まれているのである。」

2

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』155,30）

また少し後のところで、次のようにいっている。「なぜなら空気もアイテールも取り巻く多なるものから分離してくるのだからであり、そしてこの取り巻くものは多さという点で無限なのである。」

3

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』164,16）

また元来は最小も最大もないのであって、「なぜなら小ささについて、最小といったものはなく、常により小さいものがあるからであり（というのは、有るものが有らぬものになるということはないから）、また大きさについても、常により大きいものがあるからである。そして大きいものも多さという点では小さいものに等しいのであり、それぞれのものは自分自身に対して大きくもあれば小さくもある」と彼はいう。というのも、もしすべてのものがすべてのものの中にあり、すべてのものがすべてのものから分離してくるとするなら、最小と思われるものからもそれより小さなものが分離してくるであろうし、また最大と思われるものからであっても、それより大きいものが分離されるであろうからである。彼は明確に次のように語っている。「すべてのものの中にすべてのものの部分が含まれているが、ヌース[知性]だけは別である。ただし若干のものにはヌース[知性]もまた含まれている。」またこうもいう。「他のものはすべてのものの部分を分け持っているが、ヌース[知性]は無限であり、自律的であって、何ものとも混じり合わない。」また別のところではこのようにもいっている。「大きなものの部分も小さなものの部分も多さの点では等しい。そこですべてのものの中にすべてのものがあることになろう。また何ものも離れてはありえず、すべてのものがすべてのものの部分を分け持っている。最小といったものはありえないから、切り離されることは不可能であり、何ものも自分だけであるものとなることはできず、原初においてと同じく、今もまたすべては一緒にあるのである。すべてのものの中に多くのものが含まれており、より大きなものの中にも、より

小さなものの中にも、等しい数の分離されたものが含まれている。」そしてアナクサゴラスはこう主張する。感覚される同質素のそれぞれは同じものの結合によって生じ、その性格を現すと。すなわち彼は次のように語っている。「それらの中でそのものに最も多く含まれたものが、最も目立つがゆえに、それぞれのものなのであり、またそれぞれのものであったのだ。」

4

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』34,28）

というのも、『自然について』の第1巻の冒頭部の少し後のところでアナクサゴラスは次のように語っているからである。「これらのことがそのようであるなら、結合するものすべての中に、多くのもの、あらゆる種類のもの、あらゆるものの種子、あらゆる種類の姿、色、快さを持つものが含まれていると考えねばならない。人間もまた結合されて出来たものであり、魂を有する他の動物もそうである。さらに、かの人間たちにも、われわれのところと同じように、共に住む国家もあれば、手入れされた耕地もあり、彼らにも、われわれのところと同じように、太陽も月もその他の星もあり、彼らにも大地は多くのもの、あらゆる種類のものを産し、それらの中でもとりわけ有用なものをかの者たちは家中に運び込んで用に供している。さて以上が分離ということについてわたしによって語られたところであるが、分離はわれわれのところにおいてだけでなく、他のところでもなされているのである。」〔ところで〕ここで彼が対比しているのは生成界における分離と知性界におけるそれではなく、彼が比較しているのはわれわれのところの居住地と地上の別の場所であると考え人も恐らくいるであろう。しかし別の場所についてであるなら、彼は「彼らにも、われわれのところと同じように、太陽も月もその他の星もある」とはいわなかったであろうし、またかのところにあるものを「あらゆるものの種子や姿」といったいい方はしなかったであろう。

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』156,1）

また少し後のところでもいっている。「これらのことがそのようであるなら、結合するものすべての中に、多くのもの、あらゆる種類のもの、あらゆるものの種子、あらゆる種類の姿、色、快さを持つものが含まれていると考えねばならない。しかしそれらが分離される以前には、すべてのものが一緒にあって、どのような色も明らかでなかった。というのも、あらゆるものの混合がそれを妨げていたからであって、濡れたものも乾いたものも、熱いものも冷たいものも、明るいものも暗いものも混合し、また多くの土もその中に含まれており、多さにおいて無限の種子も互いに似るところがまったくなかった。なぜなら、他のものについてもまた、そのあるものが別のものに似るということはまったくなかったからである。」

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』34,21）

「しかしそれらが分離される以前には、すべてのものが一緒にあって、どのような色も明らかでなかった。というのも、あらゆるものの混合がそれを妨げていたからであって、濡れたものも乾いたものも、熱いものも冷たいものも、明るいものも暗いものも混合し、また多くの土もその中に含まれており、多さにおいて無限の種子も互いに似るところがまったくなかった。さて、これらのものがそのようであるとするなら、全体の中にはすべてのものが含まれていると考えねばならない。」

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』157,9）

しかしまた彼は「結合するものすべての中に、多くのもの、あらゆる種類のもの、あらゆるものの

種子、あらゆる種類の姿、色、快さを持つものが含まれている。人間もまた結合されて出来たものであり、魂を有する他の動物もそうである」といった上で、「さらに、かの人間たちにも、われわれのところと同じように、共に住む国家もあれば、手入れされた耕地もあり、彼らにも、われわれのところと同じように、太陽も月もその他の星もあり、彼らにも大地は多くのもの、あらゆる種類のものを産し、それらの中でもとりわけ有用なものをかの者たちは家中に運び込んで用に供している」と添えている。そして、われわれのところのそれとは別の世界秩序が示唆されていることは、「われわれのところと同じように」ということが一度ならずいわれていることから明らかである。またかの世界が感覚される世界とは考えられていないこと、時間の上でこの世界に先行するものとも思われていないことは、「それらの中でもとりわけ有用なものをかの者たちは家中に運び込んで用に供している」という箇所が明らかにしている。すなわち「用に供した」とはいわずに、「用に供する」といつているのである。しかし、現在のこととして、別の居住地域にわれわれのところと同じような社会があるといっているのでもない。なぜなら「われわれのところにもあるごとく、かの者たちのところにも太陽や月がある」と彼はいつてはおらず、あたかも別の太陽や月について語っているかのように、「われわれのところと同じように、太陽も月もある」といつているのだからである。いずれにせよ、彼のいわんとするところがこういうことであるのか、あるいは別のことであるのか、検討に値することである。

5

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』156,9）

同質素のどのようなものも生成もしなければ消滅もせず、常に同一であるということを彼は次のように語って、明らかにしている。「これらのものはこのようにして分離したのであるから、そのすべてはより少ないということもなければ、より多いということもなく（というのも、すべてより多いということはあるえないことだから）、すべては常に等しいということを認識しなければならない。」ところでこのことは混合体、同質素についていわれているのである。

6

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』164,25）

また別のところではこのようにもいつている。「大きなものの部分も小さなものの部分も多さの点では等しい。そこですべてのものの中にすべてのものがあることになろう。また何ものも離れてはありえず、すべてのものがすべてのものの部分を分け持っている。最小ということはあるえないから、切り離されることは不可能であり、何ものも自分だけであるものとなることはできず、原初においてと同じく、今もまたすべては一緒にあるのである。すべてのものの中に多くのものが含まれており、より大なるものの中にも、より小なるものの中にも、等しい数の分離してくるものが含まれているのである。」

7

シンプリキオス（『アリストテレス「天体論」注解』608,23）

「すべてのものは一緒にあった。そして数においても小ささにおいても無限であった。なぜなら小さいということも無限だったからである。そしてすべてが一緒にあったから、何ものも小ささによって明らかとはなっていなかった。」および「全体の中にはすべてのものが含まれていると考えねばならない」の引用につづいて] 無限定なるものはわれわれには決して捉えられないもの、知られないものであると彼はいう。「したがって分離してくるものの多さは論理（ロゴス）によっても事実によ

っても知られない」ということによって、このことは明瞭に示されている。とはいえ、形の点では限定されていると彼が考えていたことは、ヌース〔知性〕はすべてのものを認識すると語っていることからして明らかである。もしそれらが文字通り無限定であったとするなら、まったく知られざるものであったろう。なぜなら認識とは認識されるものを規定すること、限定することだからである。「そして共に混じり合っているものも、分離して行くものも、区別されるものも、そのすべてをヌース〔知性〕は認識した。〔今はもはやないものについては〕それが将来どのようなようになるかということ、またどのようなものであったかということ」と彼は語っている。

8

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』175,11）

アナクサゴラスは「あるものがあるものから〔完全に〕離れてしまうということは決してない」といっているが、それはすべてのものがすべてのものの中にあるからである。また別のところでも「斧で切り離すこともできない。温かいものを冷たいものから切り離すこともできねば、冷たいものを温かいものから切り離すこともできない」といっている。

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』176,28）

また別のところでのいい方によれば、「ひとつの世界の内にあるものは相互に離れてはありえないし、また斧で切り離すこともできない。」

9

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』35,13）

また少し後のところでもそれら両者〔すなわち統一的な世界と相互分離の世界〕を比較対照しつつ、彼がどのようなことをいっているか、聞くべきである。「…このようにしてそれらは旋回運動し、その力と速さによって分離されるのである。力を作り出すものは速さである。だがそれらの速さたるや、現に人間どものもとに存する事物のどのようなものも速さという点では比べようもないものであって、とにかくその何層倍も速いのである。」

10

逸名著作家の古注（ナジアンゾスのグレゴリオス『説教集』XXXVI Migne への古注）

他方アナクサゴラスは「有らぬものからは何ものも生じない」という古くからあるドグマを見出して、生成を廃棄し、生成に代えて分離を導入した。というのも彼は、すべてのものは互いに混じり合っており、増大するのは分離することによってであるというような愚かなことをいっているからである。すなわち同じ種子の中に毛も爪も静脈も動脈も腱も骨も含まれているのであって、それらは微小であるために目には見えないが、増大するとき少しずつ分離されるというのである。彼はいう、「なぜなら、どうして毛ならざるものから毛が、肉ならざるものから肉が生じたのであるか。」物体についてのみならず、色についても彼は同じようなことを述べている。すなわち白いものの中にも黒が含まれており、黒いものの中にも白が含まれているというのである。また重さの場合も同じであるとして、重いものにも軽さが混入しており、また逆に後者にも前者が混入していると考えた。

11

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』164,22）

彼は明確に語っている。「すべてのものの中にすべてのものの部分が含まれているが、ヌース〔知性〕だけは別である。だが若干のものにはヌース〔知性〕もまた含まれている。」

12

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』164,24）

また次のようにいう。「他のものはすべてのものの部分を分け持っているが、ヌース〔知性〕は無限で自律的であり、何ものとも混じり合っていない。」

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』156,13）

ヌース〔知性〕について、彼は次のように記している。「ヌース〔知性〕は無限で自律的であり、何ものとも混じり合っておらず、ひとりそれ単独で存在する。なぜなら、もしそれがそれ単独で存在するのでなく、他の何かと混ざり合っていたとするなら、何かと混ざり合ってしまった以上、すべてのものを分け持っていたらからである。けだし、先のところでわたしによって語られたように、すべてのものの中にはすべてのものの部分が含まれているからである。そして一緒に混じり合ったものがヌース〔知性〕を妨げ、その結果、それはそれ単独で存在していたときには事物を支配することができなくなっていたであろう。というのも、それはすべての事物のうち、最も微細で、最も純粹であり、すべてのものについてすべての認識を有し、力の点でも最大のものだからである。また魂を具えているものについても、より大きなものより小さなものも、ヌース〔知性〕はそのすべてを支配している。そしてまた全宇宙の旋回運動を支配しており、最初に旋回運動を与えたのもヌース〔知性〕であった。最初は小さな一点から旋回し始めたが、より広範囲に旋回して行き、なお一層広範囲に旋回して行くであろう。そして共に混じり合っているものも、分離して行くものも、区別されるものも、そのすべてをヌース〔知性〕は認識した。〔今はもはやないものについては〕それが将来どのようなことになるかということ、またどのようなであったかということ、また今現にあるものについては、それがどのようなことになるかということ、そのすべてをヌース〔知性〕は秩序づけた。そしてまた、諸星、太陽、月、空気、アイテール、これら分離したものが今現在行なっている旋回運動を秩序づけたのもヌース〔知性〕である。そしてこの旋回運動が分離させたのである。稀薄なものから濃密なものが、冷たいものから熱いものが、暗いものから明るいものが、湿ったものから乾いたものが分離した。だが多くの部分が〔なお〕多くのものに内属している。あるものがあるものから完全に分離されることも、離れてしまうこともないが、ヌース〔知性〕だけは別である。ヌース〔知性〕は、より大きなものより小さなものも、すべて同じである。だが他のものは、そのいずれもいずれとも同じでなく、それらの中でそのものに最も多く含まれたものが、最も目立つがゆえに、それぞれのものなのであり、またそれぞれのものであったのだ。」

13

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』300,27）

「アナクサゴラスはヌース〔知性〕を原理のひとつとしているにもかかわらず、彼〔アリストテレス〕はアナクサゴラスに言及していないが、それはおそらく（彼のいうには）生成においてそれを用いていないからであろう」とアレクサンドロスはいう。しかし生成とは分離に他ならないとアナクサゴラスはいつており、そして分離は運動によって生じ、その運動の原因はヌース〔知性〕であるといっている以上、アナクサゴラスがそれを用いていることは明らかである。事実アナクサゴラスは次のように語っている。「そしてヌース〔知性〕は運動を開始した後、すべての運動するものから離れた

が、ヌース〔知性〕が動かしたものはすべて分離して行った。それらが運動し分離して行く中で、旋回運動がさらに一層分離させて行った。」

14

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』157,5）

彼〔アナクサゴラス〕がいわば二通りの世界秩序を想定したということ、その一方は知性的なものであり、他方はそれから〈生じた〉感覚的なものであるということは、先に述べたことから明らかであるが、次のことから明らかである。「だがヌース〔知性〕は、それは常に存在するものであるが、それはもちろん今もなお他のすべてのものがあるそのところに存在する。〔世界を〕取り巻く多なるものの内にも、そこから分離してくるものの内にも、すでに分離したものの内にも。」

15

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』179,3）

また少し後のところにはこうある。「一方、濃密で湿っていて冷たく暗いものはこちら側、すなわち今〈大地がある〉ところに集まり、他方、稀薄で熱く乾いたものはアイテール〔天空〕の彼方へと離れ去って行った。」

16

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』179,6）

そしてこれらの原初的なもの、最も単純なものは〔原初の混合体から〕分離してくるが、他方それらとは別のより複合的なものは、時には固まって複合物となり、時には〔そこから〕分離して土になると彼はいう。すなわち彼は次のようにいっている。「分離したこれらのものから固まって土が出来る。なぜなら雲から水が分離してき、水から土が分離してき、土から冷によって固まって石が出来るのだからである。これらのものは水より一層遠くへ離れ去って行く。」

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』155,21）

事実アナクサゴラスは『自然学』の第1巻において次のように語っている。「なぜなら雲から水が分離してき、水から土が分離してき、土から冷によって固まって石が出来るのだからである。これらのものは水より一層遠くへ離れ去って行く。」

17

シンプリキオス（『アリストテレス「自然学」注解』163,18）

アナクサゴラスは『自然学』の第1巻において生成・消滅とはすなわち結合・分離に他ならないと明確に語り、次のように記している。「生成と消滅ということについてギリシア人は正しい語り方をしていない。というのも、いかなる事物も生成することもなければ、消滅することもなく、存在する諸物から混合したり分離したりして〔出てくる〕に過ぎないからである。したがって『生成する』というところを『混合する』といい、『消滅する』というところを『分離する』というなら、正しいい方をしたことになるう。」

プルタルコス（『月面に見える顔について』16 p.929 B）

さて、談論において仲間のひとりが「太陽が月に明るさを投入している」というアナクサゴラスの説を披露して、好評を博した。

逸名著作家の古注（ホメロス『イリアス』XVII 547 への古注（BT））

アナクサゴラスはいう。「われわれが虹と呼んでいるものは、雲の中における太陽に向かっての照り返しである。そしてそれは嵐の前兆である。というのも、雲の周りに集まる水が風を起こし、雨を降らすのだから。」

ガレノス（『ヒッポクラテス「空気、水、場所について」注解』VI 202 Chartier [W. Schultz, *Archiv f. Gesch. d. Phil.* 24 (1911) 325 ff.]）

そして太陽は朝に昇り、夕べに沈むと誰もがいう。ところで天体の上昇ということについては、天文学者たちも同じことを認め、それらについて共通の認識を有している。しかも、星が20日の初めに姿を現さない場合とか、日没に際しても天に残っていたりする場合、あるいは月が会合する場合に当てはまるような在り方である場合にも、見よ、それらについて見られるものすべてが、また地平線から遠ざかって行くものすべてが、出現と上昇と呼ばれる。このことについて知者アンサロス（＝アナクサゴラス？）は多くのことを語った。「（コリ星＝すばる星？）が昇るとき、人は取り入れを始め、それが沈むとき、鋤起こしや鋤起こしを始める。」また彼は「（ノリ星＝すばる星）は40日夜の間姿を隠したままである」といっている。そしてそれが姿を隠したままであるのは、彼がそれ

（すばる星？）について主張しているように、この40日の間だけである。それからそれは夜間見られるようになり、しばらくすると日没時に見えるようになり、そしてさらにしばらくすると日没後2～3時間、見られるようになる。しかしそれが見えるようになるのは、われわれが先に言及した昼夜平分日〔秋分の日〕を過ぎてからである。太陽が沈み、夜が更けると、それ〔すばる星〕ははっきりとした姿で現れる。だが昼間には西の地平線下に隠れたままである。春、昼夜平分日〔春分の日〕を過ぎると、それはやや見えにくい姿で現れる。次いでそれは没して、まったく見えなくなる。なぜならそれ〔すばる星〕は日没と同時に、夜が完全な闇に閉ざされる前に、没するからである。それは、漆黒の闇をもたらす夜の帳がくるまで再び見ることができなくなるが、その理由は、それと視線の間に小さな星が割り込んでくるからである。そしてそのためにそれは40夜という多くの夜の間再び見えなくなり、姿を現さない。これは知者にして学識家たるアンサロス（＝アナクサゴラス？）のいうところである。というのも、彼は次のようにいっているからである。「諸星の下には、ただひとつを例外として、その種のものは存在しない。そのひとつのものはガゼルの見張り番と呼ばれているものである。」そしてすばる星の近くのその下には「夜の門」と称するひとつの星がある。人々はそれを「犬星」と名づけている。…しかし後代の著名な学者たちに関しても、春の始まりは冬の後の昼夜平分日〔春分〕、夏の始まりはキマー〔すばる星〕の上昇、実りの季節〔秋〕の始まりは「犬星」の上昇とする点で彼らの意見は一致している。そしてこれは（アナクサゴラス？）の語ったところでもある。というのは、彼は別の知識にも通曉していて、こういっているからである。すなわち

「夏の始まりはキマー〔すばる星〕の上昇であり、冬の始まりはそれが没することである。」すでに詩人のホメロスもまた、「犬星」と名づけられた星 — これがすなわち〔サリ〕であるが — が

実りの季節になると燦々たる輝きで昇ってくるといっている。

21

セクストス・エンペイリコス（『諸学者論駁』VII 90）

最も自然学者らしい自然学者であるアナクサゴラスは、感覚が無力なものであることを非難して、「感覚の脆弱さのためにわれわれは真理を判別することができない」という。そしてその信頼のなさを立証するものとして、色のわずかずつの変容を挙げている。すなわち、二つの色、例えば黒と白を取り上げて、次いで一方から他方へ一滴ずつたらしめていくなら、事の真相としては変化はたしかに起こっているのであるが、視覚はそのわずかずつの変化を判別することができないからである。

21 a

セクストス・エンペイリコス（『諸学者論駁』VII 140）

ディオティモスは、彼〔デモクリトス〕に基づいて、判定基準は三つあると語っている。まず明らかならざるものの把握のそれは現れである。すなわち「明らかならざるものの眼に映る姿、それが現れである」とアナクサゴラスのいうごとくである。この言葉のゆえに、デモクリトスはこの人を称賛している ……。

21 b

プルタルコス（『偶運について』3 p.98 F）

これらすべてにおいてわれわれは動物の中で最も恵まれない状態にあるのであり、アナクサゴラスのいい方によれば、「われわれは自分自身の経験と記憶と知恵と技術を使用せざるをえない」のであって、蜜蜂の巣を採り、乳を搾り、要するに〔他の動物の産み出したものを〕かき集めるのである。

22

アテナイオス（『食卓の賢人たち』II p.57 D）

アナクサゴラスは『自然学』において「いうところの鳥の乳とは卵の白身のことであり」といっている。

偽 作 断 片

23

〔シリア語（グレコ＝シリアン）文書〕（『シリア語（グレコ＝シリアン）による哲学詩』30
[Rheinisches Museum 51,1896,538]）

アナクサゴラスはいう。「死は、人間の眼には辛いものに映るが、もっと近寄ってつぶさに見れば、極めて美しい。死は、もはや余力を有さぬ老人にも、苦悩に苛まれる若者にも、子供にも、安息を与える。もはや他人のために苦勞することもなければ、あくせく働くこともなく、家を建てたり作物を作ったり整えたりすることもないからである。死は元金や利息を要求する債権者から債務者を解放する。決まったことにわれわれは憤るべきでない。なぜなら怒りはそれを片づけてくれないからであり、もっと明るい気持でおれば、たとえ一時的であっても、それを覆い隠してくれることもあるからである。港〔死〕に停泊するなら、もはやそこには煩いは存在しない。そしてそれ〔すなわち死〕が見る者の眼に厭なものに映るとするなら、汝の眼をしばし閉じるがよい。見よ、死がいかに美しいか、わ

たしには分かったのだ。この地上で苦しみに苛まれている者たちは死を願う。これこそ下界の住まいがいかに安らかで明るいのか、証しするものに他ならない。」

24

アイリアノス（『ギリシア奇談集』IV 14）

アナクサゴラス¹も『王権について』の中で「富を蓄えるのは困難であるが、それに見張りをつけておくのはもっと困難である」といっている。

- 1) こういったのはアナクサゴラスではなく、アナクサルコスであるとの説もある。